

善隣

No.519 通巻786

2021年（令和3年）2月1日発行（毎月1日発行）

2021

2



善 隣 目 次 2021年 2 月号

公開講演会記録

従軍カメラマン ジョー・オダネル軍曹が撮影していた
「焼き場に立つ少年」と長崎原爆は、漆黒の軍国列島
を見事に抉り出していた ……………石飛 仁 2

尾竹紅吉（富本一枝）という女性^{ひと}（2）
——制度という軛……………渡邊澄子 12

さくらびと

千島桜……………細川呉港 24

陶々俳壇 ……………馬場由紀子選 27

中国ウォッチング ……………編・訳 上松玲子 28

協会通信・同好会だより …………… 30

2021 年 2 月の行事予定 …………… 31

みんなの写真館…………… 30
(田畑光永、新宅久夫)

善 隣 第519号 通巻786号

2021 (令和 3) 年 2 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03 (3573) 3051
FAX 03 (3573) 1783

発行人 矢野一彌

編 集 原田克子

校 正 朝 浩之、福富和美

印刷所 (有)ゆにおんプレス

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

従軍カメラマン ジョー・オダネル軍曹が撮影していた「焼き場に立つ少年」と長崎原爆は、漆黒の軍国列島を見事に抉り出していた

石飛 仁（会員）



はじめに

が現実です。あれだけの惨禍を招いたショック故に、ずっと後に、日の目を見ることになった核戦争を見事にとらえた傑作「焼き場に立つ少年」の写真にも、解明しなければならぬ真実も残されています。今回、敗戦直後の日本を捉えた従軍カメラマン、ジョー・オダネル軍曹の留守7か月のプライベート写真を通して、今に繋がる日本国民の敗戦直後の真姿を追ってみたいと思います。

ジョー・オダネル軍曹の船団

従軍カメラマン、ジョー・オダネル軍曹（23歳）の進駐軍としての足跡は、太平洋上を日本本土での決戦を目差す兵士

1941年12月8日に開始された太平洋戦争は1945年8月15日に終わります。しかし、実際その戦争突入と敗戦前後の事情は、決して今でも、明確になっているとは言い難い側面があります。特に、硫黄島陥落（2月）、帝都東京大空爆10万の死傷者（3月）、沖縄陥落（4月）、そして本土決戦状況に移行する当時の全国民の運命の日々と、驚愕の原爆2発投下（8月）による惨状から這い上がる敗北直後の時期のことは、さまざまに交差する非情の間隙に埋まったままで、決して、つまびらかにはできていないの



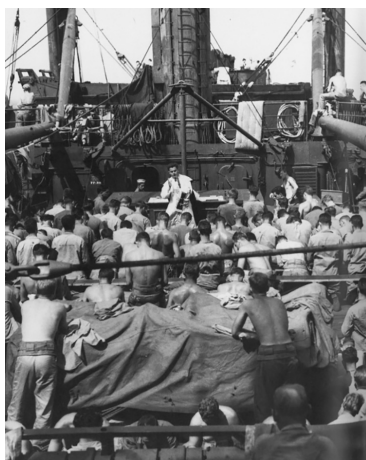
ローマ教皇フランシスコが印刷して広めるよう指示した「焼き場に立つ少年」の写真

戦争がもたらすもの

Franciscus
（教皇フランシスコ）

亡くなった弟を背負い、
焼き場で順番を待つ少年。
この写真は、アメリカ古戦軍のカメラマン
ジョセフ・ロジャー・オダネル氏が
原爆後の長崎で撮影したものです。
この少年は、血がにじむほど唇を噛み締めて、
やり場のない悲しみをあらわしています。

輸送軍艦の船上の写真から始まっています。



『トランクの中の日本』（小学館）より

6月サイパンで乗船し・北上に向かったオダネル軍曹の乗った船団は、8月には、太平洋を北上する各船団と合流しながら、さらに大船団となり黒々と洋上を無数の軍艦で染めあげて日本列島を目指します。待ちかまえる日本列島上陸決戦は、海兵隊たちを日に日に奮い立たせていきました。ほとんどの兵士たちが牧師や司祭のミサに臨み無事に生還できることを祈願していました。

8月6日、船上で警報が鳴りました。「ホワイトハウスによれば今朝広島市に新型の爆弾が落とされた。この爆弾により10万人以上の死者を出したものだと思われる」。

ジョー・オダネル軍曹は、内心まさか

と思い、事実ではなくあくまでも日本本土に侵攻するわれら兵士の士気を高めるための作戦だと思ふことにしました。ところが3日後、8月9日、またしても警報が鳴りました。「大統領発表によると、長崎に落とされた2発目の新型爆弾で8万人が死亡した」。それは、ただごとではないと思ひ、もしかすると、これで、恐怖していた上陸作戦は、なくなるのではないか、日本との戦争は、巨大爆弾の投下で終わるのではないか、船内はざわめき、次の発表が待ちどおしくなりました。そして、さらに待ちに待った次の警報が鳴りました。「東京湾でマッカーサーが日本の降伏を受け入れることになった」と。皆この警報を聞いて故郷へ帰れると船上は興奮が渦巻きました。日本本土上陸による死の恐怖から若者たちは逃れることができたと安堵するのです。死を想定する戦闘を逃れることが確実になったのです。

日本本土上陸作戦は回避され、連合軍の戦闘上陸作戦は、進駐占領管理に切り替わっていくことになったのです。戦闘と占領管理は内容がまるで違います。

その劇的な変化を知らない、ある意味では名作「焼き場に立つ少年」の写真の真実を見逃すことになるのです。です

から、ここでは、実際の出入国の大変動の中で、一人の軍曹の駐留7か月の足跡をたどることが、消えた敗戦を掘り下げる一つの方法になるのだと思います。

ジョー・オダネル軍曹（23歳）の船団（海兵隊）5万が、長崎県の軍港佐世保に上陸したのが、1945年9月22日、23日のことです。

それに先立つ情勢を見ながら、敗戦・進駐上陸・捕虜救出・労働力となっていた中国人・朝鮮人の出国、戦地からの帰還兵と家族の引き揚げを、見ておきたいと思ひます。

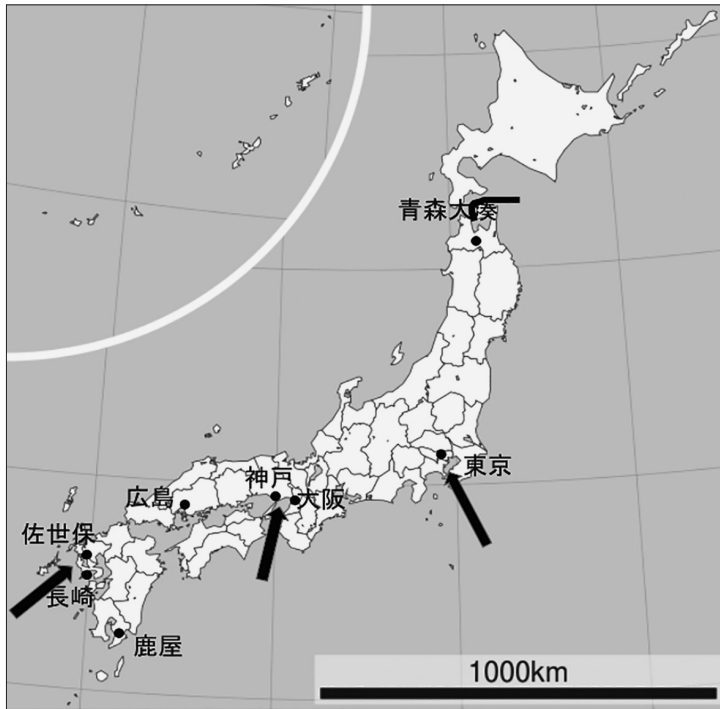
この戦闘体制から、占領支配に変わるという劇的な歴史の変化について、総括的、俯瞰的に解説したものが、言論統制の歪みもあって不足していますから、補強しながら見ていく必要があります。未曾有の出来事です。建前は国体が護持されたとしての降伏でしたが、実際がどうだったかは、結果したことを後付けするしかありません。何事にも、戦々恐々としながら進駐占領支配体制に移っていきます。

オダネル軍曹が上陸して、カメラを構えることになる以前の連合軍の行動を、図を使って簡単に見ておきたいと思ひます。

捕虜奪還作戦が最初の上陸作戦

1. 上陸作戦「ブラックリスト作戦」 (作成：石飛)

連合軍は、主に日本列島北から4か所が主なる上陸作戦「ブラックリスト作戦」を敢行します。このうち、中国・四国を英軍と豪軍（英系）に任せて、他は全部、



北海道から沖縄まで米軍が占領します。北が青森の大湊、関東・北陸・東北が東京湾、関西が神戸・大阪、九州が佐世保と長崎港からの上陸です。中国蔣介石国民党軍（連合軍）は、四国占領の案があったようですが、日本占領に参加することはできませんでした。東京（麻布）に代表部を開設するのがよつこのことでした。中国・四国は英・豪軍の占領区となります。ここで、上陸直前の日本列島動乱期の説明をしてみます。

2. 華人勞工全国135か所

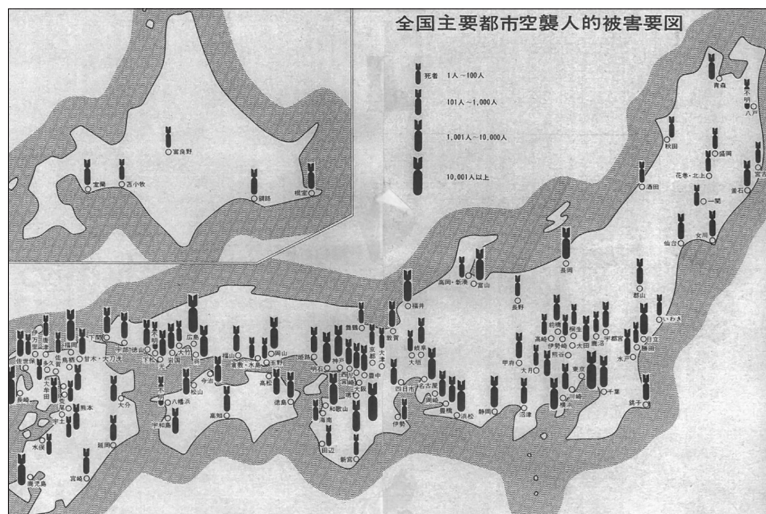
「華人勞工」4万人が移入政策による労働現場と宿舍がある全国135事業所の日本列島重要産業地点で働いていました（敗戦の年には6800人が死亡）。この事業所は、軍需産業の重要地点でしたから、日本に併合されていた朝鮮人労働者が単独や集団で寮（飯場）に、あるいは家族ごと社宅などに住み込んでの労働をしていたところでした。その数は60万人以上とされ

ていました。現在も二国間問題になっている徴用工の話は、その大半がこの重要産業地点で、雇用関係があつての問題です。

3. 連合軍の捕虜収容所

連合軍にとって日本攻撃時の最大なる関心事は、連合軍捕虜の救出です。捕虜救出作戦のことを「サマリタン作戦」と名づけて、全国107か所に点在していた捕虜収容所の地上救出作戦を実施しています。もちろん日本軍将校の案内で奥地の現場に到着しての話です。この作戦について、GHQ情報局G2のウィロビーは説明しています。捕虜収容所の兵士たち3万2000人の奪還と抑留者家族の解放が連合軍の最初の任務です。まず6万3000個のパラシュート、医薬品や食料、衣服をドラム缶に詰めてB29などから投下し、救出用病院船を東京湾に浮かべ、進駐軍本隊が到着する前に、捕虜収容所に近づいて救出しています。この捕虜救出は、9月12日前後に完了していました（ちなみに、秋田県花岡観音堂の日本軍管理の捕虜収容所「280人」は、9月12日の奪還です）。この捕虜救出作戦が終わると入れ替わるように全国4か所を中心に各地に進駐軍が続々と軍政を引いていきます。

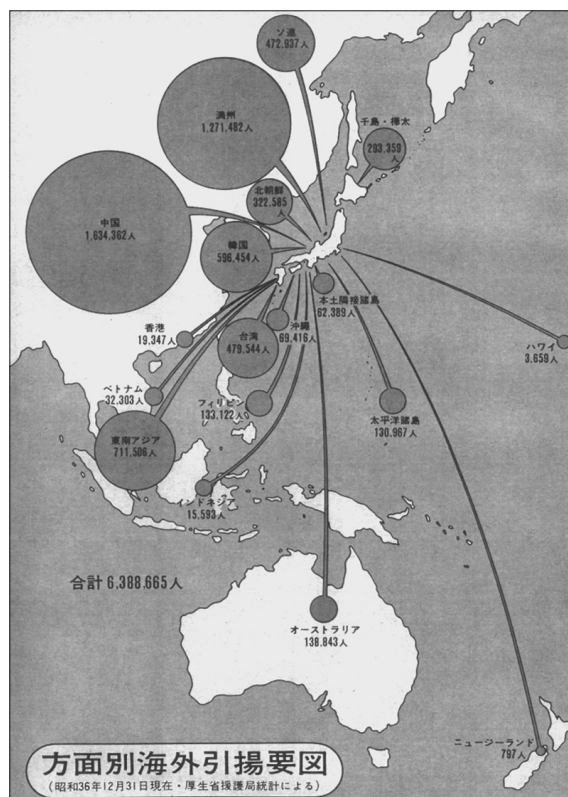
4. 日本列島空爆（出典：毎日新聞社



『二億人の昭和史 日本の戦史4』1975年
あまりにも激しい空爆に連合軍の捕虜たちも疎開している例があるほどに日本の都市は壊滅的な空爆を受けています。壊滅都市の数は107都市、その死傷者数は約340万です。日本は戦闘態勢を解除して、上陸してくる占領軍を受け入

れる体制に切り替えていきます（武器の引き渡しと軍事体制解除）。その体制のチェンジは容易なことではありません。全戦線に展開していた日本の軍勢力は、陸軍が154個師団、その他が36個旅団、海軍が20個連隊、合計69万8千3百を数え、そのうち日本本土には57個師団、14個旅団、45個連隊、総数257万6815人でした。大戦争の戦線は、日本列島だけに限られるものではありませんから、厳密に言えば「撃ち方止め」の天皇の命令は、全戦線には届かず現地軍の判断での継続もあったようです。しかし、日本列島では、見事なまでに一斉に戦闘中止が守られて敵の軍門に下っています。そこへ後に南方から中国大陸から兵と抑留者が引き揚げられます。

5. 引き揚げ者（出典：「方面別海外引揚要図」厚生省援護局）合計63万8665人



日本上陸作戦には必要なかった原爆投下

この日本列島に上陸した占領軍が、日本を包囲するように、4つの方向から上陸していることは前述しましたが、日本の軍事占領と、原爆投下（国際的アピール）には、説明しがたい亀裂（違い）があることに触れておきます。ある意味では、後にたどるジョー・オダネルの人間復興としての覚醒とも関係すると思うからいうのです。終戦前の8月8日（ソ連

が宣戦布告した日）に進攻中の連合軍の現場最高司令官であるマッカーサーは「ブラックリスト作戦」と呼ばれた本土上陸作戦を立てましたが、これは、第2の原爆長崎への投下の前日のことです。つまり、原爆投下の件は、超極秘扱いの事項でしたから、前線指揮にあたっていたマッカーサー元帥には、広島原爆投下のことも2発目投下のことも、数日前にしか耳に入っていないのです。ですから、日本に進駐上陸して、占領していく連合軍の指揮現場には、原爆投下は、想定されていないことなのです。

つまり、軍事上、原爆投下は必要なかったという意味になるのです。極めて重要な事実ですので、マッカーサーの腹心ウィロビーの説明を、彼の回想録から抜き書きしておきます。「1944年10月に日本の軍需関係専門家会議が開かれました。私はこの時の記録を入手したが、それによれば日本の重工業及び軍需産業はにっちもさっちもいかない状態に置かれていた。：（米国は日本政府がソ連に講和の仲介を頼んでいる内容を傍受していた）：日本は息絶え絶えである。日本の息の根を止めるには、通常兵器で十分である。：ソ連は原爆が広島に投下されたまさにその翌日、日本に対して宣戦布告をした。：

マッカーサー元帥は原爆が投下されるほんの数日前まで、この爆弾が存在している事さえ知らなかった」（ウィロビー著『G H Q 知られざる諜報戦』山川出版社）のです。確かに、通常兵器で十分に軍事的占領は可能であり、それを前提にした上陸占領だったのです。そもそも、連合国軍最高司令官として、原爆投下された特別な地域であるはずの広島・長崎への進駐について、特段の駐留上の注意はしていないのです。広島は、特にイギリス軍による進駐ですから、被爆後の占領に対する知識のないままです。秘密扱いの被爆直後の調査団活動は当然あったであろうし、砂漠での実験と違って殺戮度、壊滅度を科学的に冷徹に把握する調査が同時に行われたであろうことは常識ですが、戦争中の前線指揮官が知らないのは必要なかった証左です。広島も、長崎も事前

に空襲を受けていて、壊滅しているのです。日本の全都市を容赦なく爆撃している、ルメイ将軍も、全く戦略戦術上、原爆投下作戦計画は知らないままに、大殺戮の焼夷弾爆撃を繰り返しているのです。長崎被爆地跡に足を踏み入れることになる軍曹ジョー・オダネルもまた恐ろしい後遺症のある原爆症のことなどは全く知らされていないのです。

原爆の実際の所有は、トルーマン大統領と数人しか知らない極秘事項です。その初の使用が、交戦中である日本こそを唯一のチャンスとしての投下というのは、間違いなく政治的に使われたということです。あくまでも上陸作戦時に軍事的に原爆投下は必要ではなかったのです。戦争はすでに日本の負けと決まって終わっている状態です。原爆を落とすために日本の降伏を日本に先延ばしさせる工作をしていたとする研究者（鳥居民）もいるほどです。この点は絶対に見逃すわけにはいかない大問題なのです。

8月15日に天皇がポツダム宣言を受諾し、大日本帝国の降伏を発表すると、連合国軍最高司令官に決まっていたマッカーサーは、8月19日に日本軍と日本政府の代表をマニラに呼び寄せて、日本全軍の武装解除と進駐軍受け入れについての筋道を決めて指示しています。マッカーサーが厚木飛行場に飛来したのは8月30日で、東京湾ミズリー号艦上での降伏調印式を行ったのが9月2日です。この9月2日の調印式のことをジョー・オダネル軍曹は洋上で聞いているのです。

佐世保に入った海兵団5万と、長崎港出島に別の2万5000の海兵隊が上陸して進駐しています。佐世保に上陸した

部隊は、北九州域を支配し、長崎に上陸した部隊は南九州域を支配します。南ではこれに加えて、空軍が鹿児島、鹿屋航空基地に飛行機で入って進駐しています。

ジョー・オダネル軍曹日本上陸の7か月の足取り

ジョー・オダネル軍曹の任務は、通訳付き、ジープで、拳銃携帯の撮影です。行動は、まず所属する軍務の活動記録であり、廃墟の市街地を撮るというものでした。彼の任務ですが、爆撃被害状況を、軍隊の活動と共に撮れということであり、必ずしも長崎市街の原爆被害状況を撮れというものではなかったのです。結果的に、長崎の廃墟を写真に撮ってはいませんが、プライベートに撮ったものです。

オダネル軍曹の写真が貴重なのは、あくまでもカメラマンの心をもって人物をプライベートに撮っていることです。彼自身が、興味を引く日本の風俗を撮っているのです。人物の表情などや、子どもたちの姿は、胸を打つものばかりなのです。何気ない日常の姿を捉えていますから、それだけに日本の敗戦直後の本当の姿を撮っていたということになるのです。よくぞ、そういう写真撮りが軍人の彼に

許されていたものだと感じします。

そんなことができたのは、2台も私物のカメラをもっていったという点にあります。その2台の高価なカメラは、廃墟の町となっていた佐世保のカメラ店で、たばこと交換して手に入れたというのです。2台のカメラは、スピード・グラフィックとローライ・フレックスです。私は、この点やや違和感を覚えます。当時の日本では、戦時統制経済の中でカメラはとくに軍に供出させられているはずではないのか、当時の鬼畜米英との戦いのさなか、日本人は皆、貴金属類・宝石類は全部供出済み状態です、いわんや写真機をやです。彼は、2台のカメラを手に入れて、公式と非公式を使い分けたと説明しています。そのような自由が軍務上あったということ……考えさせられます。日本の軍隊では、ビンタが連帯責任の証であり、野間宏の小説『真空地帯』には、日本軍の対外的強さは「恐怖の連帯」であり、捕虜になったら自決せよと言われているの極度の強制が無法野蛮行為も発生させていることが書かれています。

米軍の日本占領上陸作戦に参加した23歳の海兵隊軍曹の従軍カメラマン、ジョー・オダネルの行動を日本軍と比較してはいけないのかもしれませんが。ヤンキー兵に

はそれなりのリアルがあつての芸当かもしれません。

オダネル軍曹の7か月の大まかな足跡は、部隊の拠点（司令部）である佐世保に始まり、大村から諫早地区、そして福岡となり、その間に、長崎市街も撮り、神戸に飛行機で飛び、広島を空撮し、離れたところでは都城の市街を撮っています。ここは、おそらく海軍基地鹿屋の公務撮影だと思えます。この7か月の駐留中に彼は、プライベートカメラで「焼き場に立つ少年」を撮影しているのです。

オダネル軍曹の撮影の足取りは、次頁の地図で説明できます。まず、最初は大村に向かっての移動です。大村には、空爆を免れた日本の第21海軍航空廠本部棟（古賀島町）がありました。米軍の上陸本隊は、大村のその無傷の建築物に移動しています。長崎出島に上陸した2万5000人の第2海兵隊の司令部が、同じ大村の隣の諫早におかれた陸軍の兵舎に駐屯していますから、この一帯が一時には2つの司令部ができていたことになります。でもすぐに、長崎に上陸した海兵隊は、南九州へ展開し、佐世保に上陸したオダネルの部隊は、北九州福岡へと移ります。

オダネルが長崎の被爆地に入るのは、

ずっと後になりますが、かれが原爆の惨状に出あうのは、むしろ原爆救済病院になっていた、陸軍病院や海軍病院のあった大村や諫早でのことです。軍曹カメランの仕事は、大村と諫早をふくめて、この周辺の状況などを撮ることになっていたので。

8月9日の長崎原爆の被災者は、市街から逃げ出し救護を求めて、列車や徒歩、荷車などで、12キロ離れた諫早や15キロもある大村の病院へと殺到したのです。病院の前庭とその周辺は、原爆被災者が3000人もが逃げてきて治療を受けたところで、まさに生き地獄の場だったの



米軍上陸図「焼き場に立つ少年」の被災場所
(作図：石飛)

です。

被爆前の女性と子どもと老人たちでこの地区は守られていました。屈強な男たちは、戦地に取られていますから、男にかわって荷車を引いて長崎に勤労奉仕に出たりしたのです。自らも原爆被災者となるだけではなく、この地区の人は逃げ帰ってくる被災者の看護治療にもあたっているのです。ですから、そこへ米軍がきたのですから文字どおり、救護の面で解放軍ということになるのです。しかし、それは被爆から1か月後の救援です。それまでの、しばらくは、日本軍医の活躍となるしかないのです。この地区の人は7割の人が、被爆と2次感染により、死亡しています。爆心地から5キロから20キロ圏内の周囲のあちこちに、遺体の焼き場が存在していました。黒い雨を被った地域や放射能の風向きによる被害を、過小評価しようとする為政者の想像を遥かに超えた結果になっていたのです。

少年のいたのは北長崎地区

諫早よりずっと長崎より、長崎から10キロになる矢上村・戸石村は、被爆者の死体を焼く作業が河原などで10月になっても続いていたと思われます。『焼場に立つ少年』は何処へ(長崎新聞社)という本を書いている吉岡栄二郎の追跡調査では、この矢上地区の川岸で「焼場に立つ少年」を撮影しているのだろとうとしています。そして、その日を10月6日か7日ではと、推定しています。その焼き場には、石灰がまかれていました。石灰は伝染病者の遺体を焼く場合を想定したものです。当時この地区では、被爆以前から伝染病が蔓延していたそうです。その上に、被爆者の後日死(血小板減少症)が続いて起きています。栄養不足と、治療対処の不足と、不衛生の上に、死の灰の影響を知らないまま、人はバタバタと突然のように死んでいるのは、被爆井戸水を飲んでいいるからです。被爆直後はやけどなどで咽が乾いて最後の水を飲んで、バタバタと死んでいく状態だったのですが、その時期を終えて、今度は、2次感染による影響で、見捨てられたまま数か月後に死んでいくのです。

その時期に、オダネルらしき米兵がこの付近を歩きまわっていたという記憶をもつ人物から、吉岡さんは、たくさんの



2016年12月、長崎市で開かれた国連軍縮会議で、原爆の熱線で負ったやけどの写真を見せる谷口稜暉さん
焼けただれた背中（『東京新聞』より）、向かって右の写真がジョー・オダネル撮影写真（モノクロ）

証言を得ていました。ジープで動き回り、何かを探すように1人で行き来している姿を皆がこわごわと見えています。

オダネル軍曹が、少年を撮影した日は、雨は降っていない薄曇りの日です。この矢上地区は、長崎に近いわけですが、この少年を撮影する数日前のことだろうと、私は思っています。彼はシャッターを切れなかったという衝撃の体験をしています。そのときに反射的に撮ったのが、有名な谷口稜暉青年（16歳）のやけどの

背中を撮っている写真です。

その日の出来事に触れておきたいと思っています。

「殺せ」と顔のない被爆者が…

オダネル軍曹は、谷口青年の写真を撮ったときに「殺してくれ」という焼けただれた男に会い、腐食する彼の胸に這う蛆虫を指でつまんでとってやり、顔かたちを失ったその皇軍兵士の男を、これ以上苦しみたくないようにと男の傍らで十字を切って祈りをささげているのです。祈ることが先でその男の悲惨な現実が写真に撮れていないのです。心のシャッターしか切れていないのです。「殺せ、殺せ」とつぶやく兵士から逃れるために撮ったのが、谷口稜暉青年の全部が焼けただれた背中だったのです。軍曹は人間としていかに生き地獄に遭遇したかという場面です。その日の夜は、その男の苦しみが乗り移って一睡もできず、翌朝再びその男のところに飛んでいきましたが、彼の姿はそこにはありませんでした。この病院は大村衛衛成陸軍病院だと思われれます。確かに、谷口青年の焼けただれた背中の写真は撮れておりジョー・オダネル軍曹の代表作になって残っています。だが「殺してく

れ」とつぶやく顔のない皇軍兵士の写真は撮れていないのです。

ジョー・オダネル軍曹は、ジープのエンジンジンをふかして周辺地域を被写体を探し求めて移動しています。そのたかぶった撮影根性をもって、ついに、そして、釘付けになる場面に、出あいます。

「石灰がまかれた焼場に10歳くらいの少年がやってきた。少年の背中には2歳くらいの男の子がくくりつけられていた。マスクをした係員は背中の幼児を下ろし、燃えさかる火の上に乗せた。間もなく、ジュウと油の焼ける音がして勢いよく燃え上がり、立ちつくす少年の顔を赤く染めた。少年は、軍人も顔負けする直立不動の姿勢でじっと前を見続けた。抱きしめてやりたい気持ちになったがもう一度シャッターをしっかりと切った。あまりにも深い悲しみがたちこめていて、少年の後ろ姿を見送ることしかできなかった」。名作「焼場に立つ少年」の生まれた瞬間です。

ジョー・オダネル軍曹が撮った感動的なこの写真「焼場に立つ少年」は、何処のだれなのか、どのような条件の下で撮影されたのか、それは、謎となってしまう。なぜなら、7か月間のうちに彼が撮った魂のプライベート写真は、米国

への帰国が決まるとともに、トランクに詰め込まれたまま、すべてのことが、以後ぶつかりと彼自身の手で封印されてしまうからなのです。

封印された駐留7か月ブライベート写真

本人に聞けば済むことだったのですが、大きな歴史的背景があって、一兵士に何もかも聞きだせなかったのが現実の戦後史でした。ここでは、推測推理を使っての分析になりますので、原稿枚数の関係で割愛しますが、憎しみ合って成り立つのが戦争であり、「ジャップを仕留めたぜ」と帰国した米兵には、悲惨な日本人の姿は、長い沈黙が強いられていたと抽象的にしか言えません。だが、撮影者ジョー・オダネル自身も、自分が撮ったブライベート写真を44年間も封印していた経緯にはそれなりの道のりがあってのことでした。

歴代大統領側近カメラマンの座から46歳で退職して病魔に苦しんだ末に、その封印したままの写真をトランクから取り出したのは、人生上の大転換を経てのことであり、すでに67歳になって後のことでした。

戦争の記憶は薄れながら、彼は、年齢と共に蘇ってくるあの日々の写真たちを、アメリカで展示して歩くまでになる心の旅があったのです。人間復興を遂げているのです。

トランクを開けたのが、1989年67歳で、自らが原爆症の疑いのある闘病生活を経て、日本に写真展のため訪れたのが、1992年で70歳のときです。日本の人々と交流するようになってさらに3年後小学館より写真集『トランクの中の日本』が出ています。73歳のときです。写真展示後には何度も日本を訪問し、あの陸軍病院で撮った被爆者の一人、谷口稜暉（当時16歳）青年に、劇的な再会を果たし、福岡の奈良屋国民学校で授業中に撮ったかつては軍国少年少女たちにも、再会しています。だが、どうしても、会いたかった「焼場に立つ少年」には、探しても探しても会うことができずに、ジョー・オダネルは2007年85歳で亡くなっています。2007年8月9日長崎原爆投下と同じ日に、アメリカ・ナッシュビルの自宅で、再婚していた日本人妻と後継者になった息子オダネルに見守られながらのことです。

「少年は何処に」

何故、「焼場に立つ少年」の少年と再会が果たせなかったのかという問題を探るためには、彼が亡くなってから、彼の日本駐留7か月間の足跡を精密に5年追いかけて刊行した、先に紹介した吉岡栄二郎の著作が唯一の参考になる書です。ジョー・オダネル死去から6年目にできたこの本は、2007年と2012年の5年間、少年は、どこのだれかを追跡した記録です。

美術評論家であった吉岡は、写真家ロバート・キャパの名作、銃弾に倒れる兵士の写真を検証した作家でもあり、この少年を追ったこのルポも大変な力作です。2015年8月2日号「公明新聞」に少年の晩年のことを書いていました。少年の名前が、戸石村（旧高来郡）尾崎にいた上戸明宏君だとしうえで、80歳で小長井（長崎県）で、亡くなっていることを同級生から聞いた消息として書いています。「嫁ぎ先で子を失った母の悲しみを受けつぎ、僅か2歳の短い生涯を終えた弟を背なから降ろして葬った後、小長井に戻った母を助けて行商し、すべてをそっと心に秘めて逝った明宏君」と。

フランシスコ教皇来日時に蘇った ジョー・オダネル軍曹の「焼き場に 立つ少年」

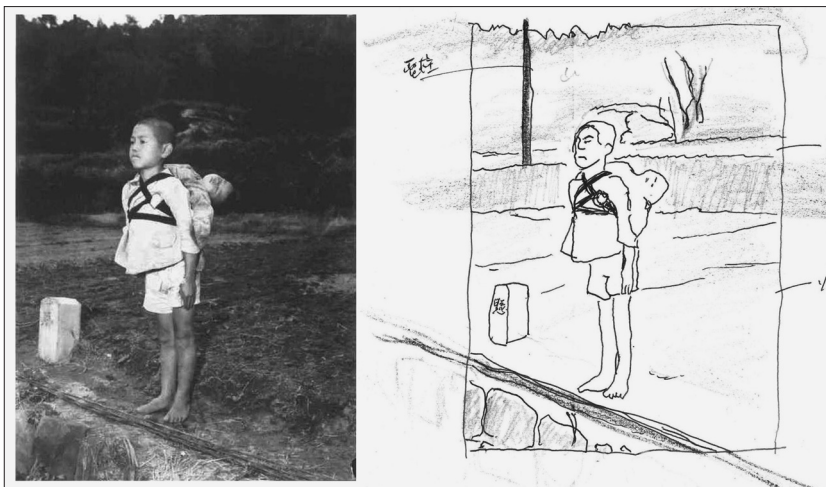
この少年の写真が、フランシスコ・ローマ教皇の目に留まった経緯は、次のようなものだったことが新しく判りました。船橋教区のカトリック信者の一人、故佐々木孝さんは、2017年8月9日（長崎被爆忌）ニコラウス神父（前イエズス会総会長）に平和の祈りの写真として送ると、今度はその写真が、ことのほか核兵器廃絶に熱心なフランシスコ・ローマ教皇に送られました。すると、フランシスコ・ローマ教皇は、2018年1月15日、南米チリ訪問時、世界の同行記者を前に、一人一人に少年の写真を配布しながら言いました。「この写真を見た時ひどく心を動かされた。戦争の結末を長々と書くよりも、このような写真は、数千の言葉より心に迫ってくるのだ」と。

フランシスコ・ローマ教皇の日本訪問が決まると、世界の信者たちに向けて少年の写真をカードにして「戦争がもたらすもの」とメッセージを添えて全世界に配布されたのです。

なかったのだろうか。封印と開封によって真実が歪められたネガとなって記憶の忘却と重なり不明になる力に押しつぶされたと思えません。少年が名乗り出ようにもその場面はなかったのです。背景はカットされ裏焼きにされています。ローマ教皇が平和のカードに使用した少年の写真は、1995年73歳のときに日本で出版された『トランクの中の日本』（小学館）からの引用したものでしたが、このとき使用された写真は、裏焼きになったものであり、さらにジョー・オダネル軍曹が撮ったときのネガには、背景の山並みが写っているものの、写真集ではカットされています。さらにその後、ローマ教皇来日が正式に決まって、少年の写真が2019年に話題になると、長崎の被爆写真に詳しい松尾隆氏によって、写真は裏焼きであることが指摘されています。戦時中の少年・少女は皆、胸に出身校と学年、氏名を書いた名札をつけることになっていった点や、ボタンが左右逆になっており、足元の石標の字「縣」も左右逆になっている点など、あきらかに写真は裏焼きとなったものでした。敗戦直後を紐解くうえで、少年の背後の風景がカットされていたり裏焼きのままだったりすることが、なにやら見捨てられてきた戦

災孤児の悲劇に重なります。

それでも少年はしっかりと訴えています。戦争するなと！



カット以前の正しい写真（裏焼きの指摘は松尾隆氏）

（2020年11月26日・第2回オンライン講演会）

尾竹紅吉(富本一枝)という女性^{ひと}(2)

制度という軛

大東文化大学名誉教授 渡邊澄子(会員)

共に東京美術学校(東京音楽学校と統合されて現在は東京芸術大学)卒者の高村光太郎(1883-1956)と富本憲吉(1886-1963)はほぼ同時に欧州を私費留学した新しい男の象徴といえるだろう。だが一八六七年生まれの漱石には遠く及ばない。漱石は繰り返し、女は結婚すると娘時代の天真が損なわれる。失わせるのは夫である男であり、結婚の制度であると書いている。

『番紅花』創刊に一枝は表紙絵を憲吉に頼んだ。雀躍した憲吉は鹿沢温泉に逗留して一枝を熱心に誘った。憲吉も一枝も筆まめで見事な字で手紙をよく書く人だがこのときの一枝の長文の返事は残されていらない。男から女への書簡は残されていて逆の手紙は残されていない場合

が多い。制度という軛の一証左だろう。憲吉の熱い誘いに応じた鹿沢温泉での数日は憲吉を三度目の正直で舞い上がらせた。プロポーズは、尾竹でも富本でもない新しい家をつくり共に美を追及しようだった。この言葉が一枝の心を奪った。結論を先に言ってしまう、智恵子に対する光太郎にも言えるが、傑出した新しい男の底にこびりついていた男尊女卑、家父長制度の残存に一枝も智恵子も気付かなかったばかりでなく、母の嫉が自分を縛っていることにも自覚できなかったことが「私」を肩幅いっぱいに生きられなかったと言えると思う。

『番紅花』を投げ出して結婚した一枝は、二度行った大和の田園への憧れから安堵村での生活を求めたが、旧家の長男

の「嫁」の座は美しい大和の自然とは裏腹に苛酷だった。憲吉と並んでの食事も許されず、田園生活への幻想は無惨に打ち砕かれた。新宿中村屋の創業者相馬黒光は信州穂高の代々庄屋をつとめた家の長男相馬愛蔵と結婚したが「嫁」の座に泣いたのだった。黒光の「嗚呼田舎よ、汝は如何に陰悪で猥褻なるよ、我は汝を追想する毎に一種云ふべからざる不快の感を喚起せざるを得ざるなり」、「ウォーヅウォースの詩に迷ふ勿れ、ロングフェローの歌に酔ふ勿れ」は一枝の思いでもあった。新しい男の憲吉は見かねて近くに家を建て、一枝の「私たちの生活」が槌屋と呼んだこの家で始まった。富本芸術にとっての大和時代である。長女陽、次女陶が生まれると一枝はルソーの『エ

ミール』、フレーベル、ストナーその他を読み込んで子どもの養育に取り組むが、これほど力を注ぐ母親が他にあるだろうかと思えるほどである。楽焼きを中心に模索する憲吉にも寄り添っている。四季にに応じて咲き実る庭の花、野菜、果物を使いながら憲吉のよき相棒になっていたバーナード・リーチの妻に教えられて、パン、マフィン、クッキー、ジャム、ローストビーフ、陽の大好きだったウーフ・ア・ラ・ネージュまでの手造りは家族や来客を喜ばせたが、一枝の作る料理は玄人はだしだったという。例えば味噌汁について書いたエッセイの出汁について。「だしに昆布と鰹節と焼小干魚を使うが味噌と具によって使うだしが違う。具に海藻類を使うときは幅広いばんとした板昆布を使う。昆布はぐらぐら煮たら甲斐はない。鰹節は力をいれずに削る。イリコだしは小さな干鰯子をホウロクでよく炒る。鰹節の場合と同じように昆布を引き上げたあとヘイリコを入れて、汁が一、二度煮え上がった時におろし、鍋はしばらくそのままにしておいてから、漉しざるで小魚をとる。具に合わせて味噌やだしを加減する。具にはしじみやあさり。あさは前夜から金気の包丁をさしこんだ水のなかで砂をはかせておいたものを、

摺鉢で擦ってから塩で幾度も水洗いする。里芋や八つ頭はぬめりをとるために二度も三度も下煮の湯をとりかえ、ぬめりが取れたら煮立った味噌汁に入れてそのまま火から下ろす。好んで唐辛子粉をふりかけたりもする。白味噌仕立ての豆腐汁は絹漉し豆腐を形を崩さずきれいな采の目に切り、下ろし際に三ツ葉を色鮮やかに投げ入れる。みじんにした葱を入れる時は赤味噌にする。豆腐をよく摺ったものに葛粉を溶いてまぜ合わせ、かき卵を汁に流しこむ要領で煮えている味噌汁にゆっくり流し入れ、新海苔をよくあぶってもみ海苔にして振りかける。香ばしく炒った黒胡麻をよく摺ってから昆布だしの赤味噌に加えた胡麻味噌の豆腐汁もいい。冬菜、小蕪、大根、葱、薄揚、こんにゃくなどを細かく刻んで実にした、舌が焼けるほど熱い味噌汁は身体が温まる。焼麩と茗荷、卵の花や切干大根、鰯汁や鯉こく、塩抜きした鮭の頭を人參や大根と煮た酒粕入りのもの、若芽は水に入れてもどす。先に芯を取っておき、だしは濃い目に。納豆汁は味噌汁でさっと煮てから手早く杓子ですくいとり、摺鉢でよく摺りつぶしてから煮えている味噌汁に混ぜ込み、刻み葱をふり入れる」。長い引用になったが、一枝の人柄がし

のばれる格好の例だろう。私などには呆気にとられるばかりだが。

陽が四歳、陶が二歳になると奈良女子高等師範学校に連れて行って個人教育を受けさせ、その後は家の裏手の空き家を教室にして、小原国芳の紹介による教師を招いて生徒二人の小さな学校を開校してしまうが、後に、社会性が育たずこの教育は誤りだったと書いている。陽の提案を実現した家族誌『小さな泉』を五号まで出してもいる。庄屋の息子が女のすることをするという笑いものになっても平気で、憲吉は洗濯物を干したり取りこんだり手伝う夫だった。子どもたちのおままごとの道具（茶碗、急須、カップ、皿など）は細筆で描いた模様も可愛らしいが、憲吉作の陶器で、ひらがなと片仮名のアイウエオの木片も憲吉の手造りだった。最高を求める二人は生活費に事欠いても娘の服はイタリヤやフランスから取り寄せた。憲吉にパトロンがつくようになった。憲吉は一枝の美感覚、鑑賞眼に絶対の信頼を寄せていた。窯出しで真っ先に見せるのは一枝だった。「おーい、一枝」と呼ばれた一枝の鋭い批評眼・鑑賞眼になかったものこそがよい作品であることを知っている憲吉は、一枝の評価に耐えなかったことを知るとせっかくの作品を

木っ端微塵にたたき割ってしまう。一枝の評価が正鵠を射たものであることを納得しているからだ。が、解放されていない男の権柄が顔を出して評価されなかったことで癪癪玉の爆発になり、その後では悔悟のしるしに丸坊主に刈るのだった。丸坊主の写真の多いのは爆発の回数の方を多しさを示しているが、それでは、一枝が夫の機嫌を損ねないように批判がましいことを言ったり、顔をしたりしなければよかったのか。一枝にご機嫌取りはできない。世界の富本憲吉への道に一枝の存在は大きい。たたき割る場面を陽はじめ何人もが見ている。憲吉研究家として知られ、安堵の旧宅を富本憲吉記念館としてその館長をつとめた辻本勇が、富本芸術にとって一枝夫人の功績は大きかった、非常に厳しい批評だったので大喧嘩にもなった、一枝夫人を浪費家のように言う人もいるが、一例をあげると贅沢な蘭をたくさん買ってきて憲吉に叱られるが、でもそれを憲吉は描く。描く気にさせる。喧嘩はお互いにほんとに好きだからできること。仕事の上では最高の妻だった、と語ったという。二人が合作していた一時期がある。一九一七、一八年に東京神田流逸荘で「富本憲吉夫妻陶器展」が開催されているが、記念館には沢山の一枝

のスケッチが残されていた。一八年作の「葡萄文蓋付壺」の底には「富一九一八」とあるが明らかに一枝によって描かれた模様であると副館長の山本さんは言い、他にも一枝の筆と思われるものが結構あるという。一枝は「富本の焼いた」と書かず「自分たちの焼いた」と書いていて二人の共作という認識だがここには傲慢さは微塵もない。憲吉もその通りと受け止めている。

娘が個人教授を受けている間、一枝に憧れた女高師生たちに取り巻かれると、彼女たちを美術館や博物館に連れていくようになり、まもなく彼女たちは安堵の家に押しかけてくるようになったが憲吉は嫌な顔をしなかった。なかでも井出（後の丸岡）秀子は泊まり込むようになり、富本図書館と呼んだ一枝の蔵書の山に入り浸った。後に日本で初めて農村女性を直視した画期的著として名高い『日本農村婦人問題』（一九三七）は、一枝が秀子に農村婦人問題の重要性を教えたことによる、一枝が紹介の丸岡重堯と結婚後の労作である。

夫、子、その他多くの人たちからなくてはならぬ人として頼られ、忙しく一日が終わった一枝を襲い来るのは、私を生きたい、私には私を生きる権利がある、

なのに私は私を生きていないという悔しさ嘆きであり寂寥であって、ひとり涙を流すのだった。詩やエッセイを依頼されるようになってはいたが、その程度では自足できず、懊悩は深まるばかりだったが、この頃発表のものには「さびし」

「おもひみだれぬ」「寒し」が頻出する。呻きの表出の一例に、「おのれのあるかなしの小さな才能をたのみよる心よ。おまえのために私はいつも苦しむ。おさへつけても、どんなにおさへつけても、すぐ溢れあがる泉のやうに滾々湧きあがるのだおまへは。私は苦しい。或時は仕方なくおまへを憎んだ。おまへを呪った。突おまへを邪魔にした。蹴り飛ばした。突き飛ばした。だがそれらはみなだめだった。おまへと私はびつたりひつつく。矢張りおまへが在ることが、どんなに私を生かしてゐよう。本当におまへを限りなく愛してゐるのだ、おまへを感じると私の心は生々と跳ねあがる。ふくれる。あるものに必死の力ですがらうとするときつとすがりつけるやうに強く確かな自信力がこみあがる。おまへを生かしきりたい。思ふだけ存分に。思ふだけ存分に生かしきれないのが淋しい」とある。一家はよく旅行する。憲吉の窯元訪問が目的だがそれならなおさら一枝がいなければ

ならないからだ、家族大事も憲吉の真実だった。だが、憲吉との相愛相敬への疑念はないものの、少しずつ彼が自分の自己本位を優先していることに気付き、一枝の自己本位への思いやりのないことの不満を感じるようになっていく。

娘に呼び掛けた形の「母親の手紙」（1922・11）には「私はもっと勉強したいのです。その時間がもてない苦しさでなかなか寝付けずにいたとき」陽ちゃんが心配してくれたことがありましたね、「私が自分を捨てて切れないためにまだ幼いあなた方をそんなに悲しませていたのかとショックをうけました」、でも「たとえ小さくても自分の仕事をしたいという自分の『我』を捨てきれないのです」、「それにお父さんとの生き方の違いもあるのです」。あなたたちが大きくなったらちゃんと話しますが、「すべてを疑え、信じるな、というお父さんの生きる姿勢と、すべてを信じ愛したい私とは平行線なのです」。「私のさみしい気持ちを察してください。いまに大きくなったらわかってください」とある。憲吉が、一枝のこの絞るような哀しみを思いやり、妻のスピリットをこの手に掴みたい（漱石『行人』）と思ったことは、自分の仕事第一の彼にはなかっただろう。

自分を生ききれない苦しさで輾転反側しながらも毎日忙しい。どんなに忙しくても紙とペンは離さず、わずかな時間を盗んでのエッセイ、感想、詩は一九一七年から『婦人公論』『女性日本人』その他に二五〇編以上発表している。そのどれかを読んだことで憧憬を深めた奈良女子高等師範学校の生徒たちが土日に押しかけたことは既に述べたが、一九二一年に創立された自由学園の第一回生たちが羽仁もと子に引率されて関西に来たとき、一枝の家にも立ち寄っている。そのときの生徒の中に石垣（当時は田中）綾子や村山（当時は岡内）籌子がいた。彼女たちも初めて会った一枝に衝撃を受けたが、以後頻繁に「人生の指針を求めて訪ね」たという綾子は、「いつもすうりと伸びた長身の背すじをのびし、髪は前を少しふくらませて上へ持ち上げ、くるくると束ねて長い襟足をみせていた。観音像を思わせる顔に白粉気はなく、久留米紺の対に黒い半襟、幅の狭い帯を低目にゆったりしめている。常識をこえたおしゃれっ気と、絵描きらしい独特のセンス」の「多くの若い女性に恋心を抱かせた不思議な美しさ」に「心惹かれ」て泊まりがけで押しかけ、「二人の女の子を挟んで寝る蚊帳に入り込んだ。夫妻には迷惑至

極だったろうが、私は一枝のわきに眠れるのがうれしかった」と書いている。重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された染織家志村ふくみの誕生もその淵源は一枝といえる。ふくみの母は夕陽丘高等女学校で一枝の妹福美と同級で親友だったので校内一の人気者一枝とも仲良しだった。「ふくみ」は「福美」から勝手にもらったという。三児の母になっていたある日偶然、阪急電車の中で一枝と会い、そのときから終生の友人となり頻繁に文通を重ねたが「あふれるような豊かな筆致の三行にも及ぶ手紙」もあった。「カマヒラク アスコラレタシ」の電報で訪ね、「女かて、自分の思いを貫いて生きていく人はいはる」と心を揺すぶられて社会活動をするようになったが、民芸運動に関わって知った青田五良の草木染めに魅せられたが引き継げなかった。その後、娘のふくみが「結婚にやぶれ」子どもを抱えたこれからの生活に賭けたのが母が執着した草木染め織物だった。ふくみは一枝と憲吉から教えを受けながら不転転の決意で未開拓の領域に分け入り、今日を築いたのだった。初めて富本家を訪れた日のことの記憶は鮮明だ。そのとき一枝は白磁の大壺に臘梅を活けていたが、「あふれるような黒髪を、ゆたかに結

い上げ、唐棧の着物に、濃い臘脂の半襟をわずかにのぞかせ、帯は思い切り下めに、幅広くざっくりと締めて、大幅の花がゆらぐようだった」、思えば「夫人は私にとって、出会うべきわずかの貴重な存在の方だった」。その後、ふくみがこの道に入ろうとしたとき、「家庭を捨ててなら思い切って捨てよ。出たり入ったりして、夫や子供に未練を残してはならない。あともふりむかず仕事に没頭しなさい。私はそれが出来なかった。あなたはやりとおしなさいよ。本当に捨てたものは、また別の形で必ずかえってくる」と言われ、「捨てるに捨てきれずに混迷の極にあった」ふくみに道を切り拓いてくれ、以後もふくみの仕事を見つけて「骨身にこたえる鋭い批判で」苦言を呈してくれたという。一枝からの手紙について、「巻紙の上に、花とかけば花が、風とかけば風が舞い、美が充満してくるような文字であり、達意の文章であった」（『一色一生』）と書いているが、私のもらったふくみの手紙も美しい文字だった。

そんな一枝を驚愕させたのは夫の背信だった。秀子の紹介でこの家に来たお手伝いさんと憲吉が男女の関係をもっていったことを知ったのだ。二年間も気付かなかったことへの自虐からうろたえた。愛

が深ければ深いほど背信を知った心の傷口は深い。

憲吉の背信を知ったのは何時だろう。一枝が小説を意図して書いたものに「貧しき隣人」（1922・11、『婦人公論』）と「鮎」（1926・10、『週刊朝日』）がある。憲吉の背信を知った後の作品は「鮎」で、こちらの方が数段優れている。文学年表に刻印されているレベルの作である。一枝にとって小説家は少女時代からの見果てぬ夢だった。紙幅の都合からうわ撫でに紹介したい。「貧しき隣人」には「この一篇を山本願弥太御家族に捧ぐ」の献辞がつけられている。山本願弥太は関西の実業家で『白樺』の求めに応じてゴッホの「ひまわり」を購入した美術愛好家だったが憲吉の作品の蒐集家でこの時代の最大の後援者だった。一家はこの人に随分助けられた。たとえ生計の現実が火の車でも最高の作品を生み出すためには惨めであってはならない、贅沢なライフスタイルを通せたのはパトロンのお陰である。パトロンは他に憲吉の作品の最大のコレクターであり経済的援助を惜しまなかった新潟の伊藤助右衛門。この人とは家族ぐるみで滞在したりと親しかった。大正期の後援者に大阪土佐堀で美術店を経営していた森川嘉助のほか、

写真雑誌『光画』を主宰し、写真を美術として位置づけた野島康三がいる。彼は東京小石川の自邸で毎年憲吉の個展を開いて憲吉の仕事を世に広めてくれた人だ。「貧しき隣人」は島崎藤村の『破戒』が背景にあり中條百合子の『貧しき人々の群』が意識されていたかもしれない。人の好い私が断るわけはないと見込んで四、五日おきに草箒と草履を売りに来るお篠婆は病身の息子と貧しく暮らす被差別部落の人。物置は草箒と草履で溢れそう。もういらぬ。いくら断っても去らない。買わずにお金を渡したのではお篠を乞食にしてしまう。そんなことはできない。断れという夫と諍いになる。次に来たとき私は出て行かない。仕方なく出て行った夫の困惑ぶりに思わず笑ってしまう。この笑いが二人を仲直りさせた。その後十日以上も姿を見せない。来られるのは迷惑なのに来ないと妙に心配になる。息子の病気が悪かったからと言い、やっと姿を見せる。「しばらく顔をみると寂しい」のお篠の呟きに私は人間の真実を感じてはとする。読書家の一枝のトルストイの影響が見られる差別・人間の尊厳・人権問題への思想が反映した作だが、同時期『中央公論』掲載の野上彌生子「澄子」よりはるかに上等作だ。チャ

レンジ意識で書かれた「鮒」は明らかに憲吉の背信を知って以後の作品と読める。二四年は三月に風光明媚な伊勢の的矢に一枝は娘たちと長期滞在しているが憲吉から孤独の寂しさを訴え、日常の細部までを綴ったほかに仕事の相談を記した手紙が頻繁に送られている。なんば（とうもろこし）が熟したので送る、窯が開けてから西瓜を送るなどあるが一枝は一切返事を出していないようだ。先入観によって読んだためかもしれないが、背信発覚の慚愧から下手に出てご機嫌取りしているようだ。その後、越後の伊藤家に娘と滞在しているが、六月から十月にかけて本郷弓町の中江百合子の家に長期滞在している。中江百合子は俳優東山千栄子の妹で料理研究家。この家に滞在中、憲吉の初めての著書『窯辺雑記』（1925・11、文化生活研究会）の出版があって、文章の添削、造本、題字、挿絵、構成、用紙すべてを憲吉から任せられ、染みこんでいる母の躰の「良妻賢母」によるのか、本造りという一枝にとってわくわくの仕事だったことによるのか懸命にとり組んでいる。中江家長期滞在は背信問題で何日も徹底的に話し合った後だが、どんなに話し合っても傷は癒えず、距離を置きたかったのだろう。藤村に作品を

読んでいただけないかと手紙を出したのはこの家からであり、中江方一枝に返事がきている。そこには「ようこんで拝見」します、河井醉茗から贈られた『現代婦人の手紙』収載のあなたの「父上に」を読んであなたへの理解を深めた、自分の作品も読んで欲しいので二、三冊送るとある。一枝は「鮒」を持って藤村宅を訪ねている。合格か不合格か待ちくたびれた四か月後、「好いお作」だが深刻な作品なのでモデル問題が心配の返事。藤村は自身の『新生』問題から躊躇したらしい。「鮒」は書かれてから二年半後に、藤村の「鋭い感知力なしには」「叶はぬ」「鮒」を「象徴にまで持つて行つた」作との推薦文がつけられて『週刊朝日』に発表された。

お新は安吉を心底から憎んでいる。夫の俊造が弟の晋二と釣りに出かけた後、食事の準備で後回しになった寝室の片付けを始めたとき安吉がやってきた。「いやな奴、いやな奴」。お新が安吉をこれほど嫌うのはお新が相愛の俊造と結婚して東京からこの田舎に来たとき、近村きつての大地主の息子で俊造の甥の安吉に「余所者、余所者」といじめられたばかりでなく、「伯父さんには面白いことがあったんですよ。情事にかけてもね……」

とにやにや笑い、美人のお勝と結婚するはずだったんだ、と卑しげに言われた屈辱感が消えないからだった。俊造の愛情を信じて安心しきっていたお新の心に寂しさが溢れ、このときお新は生まれて初めて涙の痛さを味わったのだ。その後思わず寝過ごして夫を送り出してから寢床の始末をしているところに、のっそり入ってきて寢室をじろじろ見たりする安吉に我慢ならないのだ。絶対の信頼関係と思い込んでいた夫にときに影のさす一瞬に襲われたりするようになった安吉が憎い。俊造たちが釣りから帰ってきた。安吉は途中で帰ったという。よかった、と嬉しさを隠しきれない。覗き込んだ魚籠のなかの柳ばやが美しい。すると大きな鮒がよろめくように浮き上がってきた。擦り傷に血を滲ませて泡を吹く力なく沈んでいた。安吉が釣ったのだという。死んでしまいう前に早く鉄砲和えに料理してくれと急かされ、死にかけてるんじゃ気味悪いと手を出さないが、深い藍色の苦しげな目の鮒が安吉とひとつになった。目をつぶって思いっきり遠くに放り投げ、遠くの方で表がざわざわと揺れたのをぼんやりと凝視ながら「指先に残った、ぬるぬるとした気味悪さを、幾度も幾度も拭ひとつてゐた」という心

理小説である。信じ切っていた夫の過去に女性のいたことを夫の縁者から侮蔑的に知らされた屈辱と怒りと哀しさ、田舎びとの無神経さで私生活に泥靴でずかずか入り込まれる耐えがたさなど、男性には理解しにくいだろう微妙な、そして切実な心情が巧みに表出されていて、この時期の年表などに採取収載されている女性文学に充分拮抗し得る作である。

少女の頃から文学好きだった一枝にとって「鮎」に賭ける気持もあっただろうが惜しくも続かない。憲吉の女性問題に絡んで安堵村での同居生活に居たたまれなくなったのだろう、陽の教育問題もあって東京の学校に上げようと中江百合子方に長逗留して娘を成城学園に入れていゝるが実質的別居生活だ。憲吉からは頻繁に手紙がきているが少し変化が見られる。これまでの「一乙様」、「K」または「KEN」が他人行儀に「一乙様」「憲吉」となっている。一枝に対する懺悔・謝罪の気持からか、妻子が世話になっている中江の分と一緒に梨を三箱送る、寒くはないか、セルを送るが毛布はあるか、などと、仕事の進展報告や寂しさの託（か）ちとともに細やかだ。越後の伊藤から送金があるはずだから入金しだい送る、そして言わずにいられない。「矢張り一週一度位皆と

遇つて話したり、けんくわする」のがいい、「もうそろ／＼帰る事にしては如何、何時帰るか」、送った松茸や原稿について無音は何故か、あなたが帰ったとき少しでも楽しみが深いように、自分の考案した竹製ベッドを二日ばかりで作った、ふたりが乗って踊っても大丈夫で、分解して送ることもできる、子供用が必要なら作って送る、などとご機嫌取りしていて、自分たち夫婦は安堵で暮らし、子どもたちは東京の学校に通わせると考えていたことが窺われるが、一枝の気持を忖度して家族みんなでの東京暮らしも考慮されている。生家は別荘として利用するとして、家族四人の想い出多い榎屋を捨てるのは惜しい、生まれた家とか家名などにな何の愛惜もない、富本という名への執着など全くない、移転先は東京も一候補として二人で歩いて場所を探さないか、その相談もしたので一度帰って欲しい、大阪でも法隆寺でもいい迎えに行く、などと細やかで真剣だ。代々庄屋をつとめた素封家「富本」はなくなってもいい、でも新しく築いた家族の想い出の詰まった家「榎屋」を消滅させるのは忍びないと言う。一枝との結婚に際して富本も尾竹もない二人の新しい家をつくるのだと言った「家制度」から解放された近代の

息づきの蘇りが見られる。夫の仕事の最大最高の理解者であり共走者である一枝を嘆かせ怒らせたことに忸怩たる思いに苛まれての懺悔の心情を縷々と綴った長文のこの手紙は感動的である。一枝はどんな返事をしたのだろうか。返事はしなかったらしい。一月の手紙は一枝が妹福美の結婚先安宅に寄留していたらしく「安宅氏気付け」となっていて依頼原稿の随筆「野菊の茶碗」の添削を頼んでいるが、「シートを四枚洗濯して今アイロンをかけて居た処が夕暮がせまつて来て余りのさみしさに、何むだか頭が悪くなる様な気がした」とある。同情を誘おうとしたのか。二六年の憲吉年譜には「一月、柳宗悦、河井寛次郎、浜田庄司が安堵に来訪。八月、家族とともに出雲玉造温泉に滞在。十月、娘二人を開校予定の成城学園女学校に進学させるため、東京に移住。千歳村（現 世田谷区上祖師谷）の新居の設計。とあり、翌二七年は一月二日、長男壮吉生まれる。四月、新居に移る。八月、築窯にとりかかる。九月、資金調達のため野島康三を窓口に陶器を頒布する会の計画をたてる」とある。深い怒りと哀しみは何度話し合っても消え去ることはなく苦しんだが玉造温泉行きは落ち着きを得たからだろうか。長

男誕生は陶誕生後十年経ってである。男子誕生に憲吉はリーチに雀躍の手紙を送っている。祖師谷の家はこの時代に水洗トイレの洋風で、窯開けの日は大勢が詰めかけ、また一枝に癒やされたくて集まる女性作家やお仲間たちのサロンとなった四〇畳もある広間や、泊まり込む人たちもいた部屋数の多い見事な家だったという。「東京に住む」（1927・1）には東京移転の理由の最大は、それ以外は枝葉と言えるが人間間に起きる危機で、「久しい間そこに悩み、嘆き、かなしみ、ありだけの人間らしい悲痛な感情」を味わい尽くした上で這いだしてのことだった、と書いているがこの頃の日記には煩悶する一枝がリアルに吐露されている。以後二〇年間の「東京時代」は富本芸術における円熟期で富本憲吉の名が不動のものになった時期である。そこに一枝の力は見逃せない。「大和時代」は富本芸術における模様についての確信「模様から模様を造らない」を得て「曲がる道」「大和川急雨」「竹林月夜」など模様の概念を一新させた生新たな風景模様を成立させたが、「東京時代」は世界の憲吉に飛躍させた時期で色絵磁器の本格的制作は庭の定家葛の花の五弁を四弁に創案した「色絵四弁花模様飾壺」「色絵赤更紗模様

飾壺」などの生涯の代表作を生み出している。国画創作協会に工芸部を新設し、帝国芸術院会員、文展審査員、東京美術学校教授就任など公的な活動にも乗り出した時期でもある。開窯日の広い応接間は興奮で沸き返り一枝の自然体だが誰をも充たす接待によって至福の時を共有する場となった。憲吉は一枝への感謝の気持もあったのだろう、一枝の仲間に「秀子愛用」「俊子愛用」「須磨子愛用」などと名入り茶碗をプレゼントして喜ばせている。

『女人芸術』が長谷川時雨によって刊されたのは一九二八年七月だが、この年三月の共産党員たちの大検挙3・15事件があり、特高警察設置という戦争の時代に入っていて文学界もマルキシズム理論に拠ったプロレタリア文学の高揚期にあった。時雨も事実的伴侶で出資者の三上於菟吉も左翼ではなかったが潮流のしぶきを避けることはできなかった。この雑誌掲載の一枝のエッセイは紙幅の都合で引用できないのが口惜しいがなかなかいい。平塚らいてうが近くに住むようになり、娘や息子が一枝の子たちと歳が近く学校も同じなので家族ぐるみで親しんだ。らいてうの留守中に娘の曙生が急性盲腸炎になったときはいち早く気付いた

一枝の気転で一刻を争う危険な状態を免れるなど、細やかな気配りをしている。奥村博史は画家として自立できず家計不如意を救う手立てとして、憲吉の作品展開催時に主催者の不許を押し切って趣味で作っていた指環を並べたところ思いがけず好評だったので、指環作家として一枝も発起人となった頒布会を立ち上げ、三五年にも憲吉近作陶器展の一角に「奥村博史の指環」を併陳するなど博史を押し出す援助をしているのに、らいてうが一枝について触れた文章は意地悪い。娘と夫の看病に疲れ果てたらいてう慰労の会を資生堂で仲間と開いたとき、『青鞥』の人たちへの批判を隠さず、女性作家では宮本百合子以外を評価しない野上彌生子が珍しくここに出席していて、この日のことを日記に、「富本さんの美しい熱情を今夜見た。彼女はたしかに純真なところを持つ」と記している。これらの作家とは違うという特殊人を自認している彌生子の没後岩波書店からの刊行が前提とされていた龐大な日記の記述は生な感想が多い。戦争下、一枝が彌生子に反戦運動へのカンパ依頼に陽を使いにだしたらしいことが書かれていて、カンパしたのかどうかは書かれていないが、陽の美しさに感心したことが書かれている。ア

ナ・ボル対決が過熱化し、マルキシズムが優位にたち発禁が相次ぐようになって『女人芸術』は廃刊された。満州事変勃発で弾圧激化、検挙者の相次ぐ状況下で滝川事件、佐野学・鍋山貞親の獄中転向、小林多喜二虐殺と続くなかで目をつけられていた湯浅芳子との交友関係から注意人物とされわずかなカンパによって一枝が検挙されたのは三三年八月五日で十八日に釈放されるが、入れ替わりに文化学院生だった陽が検挙されている。矢田津世子や林芙美子までが検挙されている凄まじい時勢だった。「憲吉夫人」と新聞に載って憲吉を激怒させ、家に帰りついた一枝は庭に蹴落されたという。ライフスタイルは近代的だが憲吉は宮城や明治神宮の前を通ると車中でも直立不動で最敬礼し、四五年刊行の『富本憲吉陶画集』には末尾に「この画集を謹んで荒鷲に捧ぐ」の献辞をつけたりする思想の持ち主だった。愛する人とのこの生き方の違いが一枝にとっての辛さであり、これが晩年の一枝の生き方に繋がっている。

廃刊に追い込まれた『女人芸術』の後継誌として時雨は『輝ク』（1933・4（1941・11））を創刊した。多喜二虐殺の年である。この雑誌は軍部べったりの戦争使喚・謳歌を加速させた性格で、

時雨は「輝ク部隊」員に慰問袋の献納や遺児、遺家族、傷病兵の慰問などを競わせる叱咤激励を本気でして、陸・海軍からの感謝状に感激してもいる。戦地の兵士慰問の『輝ク部隊』『海の銃後』『海の勇士慰問文集』を陸・海軍の恤兵部の協力のもとで刊行してもいる。宮本百合子も窪川（佐多）稲子も参加・協力しているが、『女人芸術』ではブレインの一人だった一枝だが『輝ク』には一切の協力を絶っている。東條英機内閣が成立して米英を敵にまわした太平洋戦争勃発後は言論・出版・集会・結社などの取締り激化で文学者も戦争に動員される時代になるが、物資欠乏で国民は悲惨な生活に追い込まれる。このようななかで芸術的香気の漂う一枝の家の応接間は多くの女性たちの息継ぎのできるサロンとなった。とげとげしい気持の柔らかなげにはまず食べることだろう。食料調達の買い出しに一枝は行かねばならなくなった。頼りになるのは大谷藤子だった。女を愛する藤子は文壇きっての美女矢田津世子のコント作家から芸術的完成度の高い純文学作家への飛躍に手を貸した人だが、津世子の没後、津世子とは異なる魅力に満ちた一枝の力になるうとして頻繁に生地秩父から食料を届け、また一枝と一緒に

買い出しにも行き、一枝の家に泊まり込むことも多くなった。この頃の一枝について藤子の記述に、独特の美感覚から買い出しはリュックが常態だったが一枝はリュックは背負わず、手造りのなかなかモダンな袋、もんぺは最後まではずかず、一枝の人となりによって、買い出し先の強欲な農家の人たちを親切にさせてしまったなどがある。

四五年四月、資材入手絶望の判断から祖師谷で最後の窯を焚いて閉窯とし、東京美術学校の教授と兼任していた工芸技術講習所の生徒と職員を引率して資材調達可能な高山に憲吉が疎開したのは五月だった。空襲激化で一枝たちは藤子の母の家に疎開することになった。高山の憲吉から早く秩父に行け、早く、早く矢のように電報が届き、長期戦覚悟で自分も十一月には秩父に行く。とにかく先に早く行けと怒るように急かされて藤子の生地の秩父に一枝たちが疎開したのは七月だったが、ひと月も経たずに敗戦で終戦となり、空襲を逃れた祖師谷の家にすぐに戻っている。生徒たちを東京に帰した憲吉は資材調達の可能な高山に留まった。四六年四月の新選挙法による総選挙に際して憲吉不在の家を開放して徳田球一を支援するが、その後戻った憲吉

は一枝を忌避して単身で安堵に戻っている。憲吉年譜には「一九四六年（60歳）六月、東京の窯を閉鎖して、単身安堵に帰る。七月、東京美術学校教授を正式に辞任。十月、帝国芸術院会員を辞任。十二月、国画会を退会」とある。戦後の陶芸家としては二二年二月の「富本憲吉新作品展」（大阪・高島屋）から始められている。「東京の窯閉鎖、単身安堵に帰る」の裏に事は起きている。憲吉不在の家に藤子が頻繁に来ていたことから、戦争下でも大勢の女性たちが集まり芸術的香気の漂うサロンへのやっかみから誰かがフェイクを憲吉に囁いたのだろうか。それをまともに受けて吹聴して歩いた憲吉の一枝への愛とは！ 憲吉の一枝忌避は一枝と藤子が穢らわしい性的異常者の同性愛関係と聞かされたことによる。長年の生活を通して一枝が性的異常者であるかどうかは一番よく知っていたはずではないか。明日がわからぬ戦争下を離れて暮らしていて神経がノーマルな状態ではなくなっていたのか、女性問題で散々痛めつけられた辛さが一挙に噴き上がったのだろうか。一枝が陽に宛てた長文の手紙が残っている。最後の用紙の裏に陽の筆跡で「21年暮（？）父のこと 母の手紙 最後に父が家を出たあとのもの」のメモ

書きがある。水沢澄夫が「あの人はレズビアンだった」と憲吉から聞いたと語ったというのを井手文子を書いてある。娘を対等の人格として、夫に妻はレズビアンと吹聴されていたことを知った屈辱感と怒りを吐露した感動の手紙である。離婚も構わないが離婚は父さんの妄想と酷さを承認したことになる、それは子どもたちのためにもできない、狂人じみた烙印を押されても人々から信頼され、大道を顔を上げて歩けるか、「お父さんのやりかたに沁々つらい泪がながれます」などとあって辛さが思いやられる。ジェンダー視点などのない「教育勅語」の時代において、レズビアンは薄汚く穢らわしい変態性欲者としていた。 憲吉は以後東京に戻ることはなく、京都を拠点とした「京都時代」になるが、この時代は仲間の窯を借りる「放浪の陶工」として色絵金銀彩を完成させたが、これは華やかさから外国で喜ばれたらしい。芸術度の最も高かったのは「東京時代」と言えそう。五五年に「人間国宝」に認定され六一年には文化勲章を受章している。国からの章を有り難いと思わぬ一枝は世間的榮譽に輝く人の妻として隣に寄り添えないのを情けないなどと思う気持は微塵もなかった。神近市子も丸岡

秀子も井手文子も誰も彼も一枝について書いている人たちは一枝を「捨てられた妻」と断定して書いているがそれは違う。憲吉の方が捨てられたのだ。憲吉没後三年の九六年五月十九日〜七月三十一日まで富本憲吉記念館で「安堵帰郷五〇周年・富本憲吉書簡展」「手紙待つ」―安堵から妻に宛てた二〇通―が開催された。四五年九月の陽宛の憲吉の手紙には、食料も不自由な東京から逃れて安堵で皆で暮らすことを提案しているが、ここには一枝が排除されている。ところが四六年九月二十一日からの手紙は正気に戻ったのか、農地改革に関わる財産問題など一枝に相談したいので来て欲しい、十月なら正倉院展も見られると日常生活についての細部にわたる報告をしながら懸命に来安を頼んでいる。このときは送金もしている。確かめもせずに妻をレズビアンと貶めた視線で触れ回ったものの怒りの興奮が冷めたのか、下手に出て頼んでいるが一枝の矜持は憲吉を許さず手紙を黙殺している。お金も突き返したようだ。四七年二月四日の手紙は一人ではやっていけない、かなしいと悲鳴に変わっている。自分の生きたい生き方を犠牲にしたのは母の躰に縛られていたのだと今更気付いたが憲吉の半身になって尽くしてきた

たことへの悔しさから返事もせず送金も拒否したらしく、受け取って欲しいと書き、お涙頂戴戦術か健康の不調を訴えている。一枝は覚悟を固めて自分の足で立つ方途を摸索している。お嬢様育ちで経済的自立を考える必要もなかった一枝だが五四歳になって初めて自力で生きねばならなくなる。親しくなっていた中村汀女の俳人としての飛躍を助けて俳誌『風花』の創刊に全力を傾ける。一枝へのご機嫌とりか、この雑誌の表紙・扉・カットを憲吉が描いている。一枝の人脈から構成・編集されたこの雑誌によって汀女の名は高まり六〇年、ホテルニュージャパンで盛大に開催された百号記念大会時には全国規模の俳誌になっていて、講演・講座の要請もひきもきらぬようになりカルチャーブームの先駆けになった。憲吉の手紙は泣き落としに変わっている。作陶と子育てに一体となっていた頃を回想し、死が間近、会いたい、「東京より手紙なし、待つ」と感情に訴えた手紙が矢次ばやに速達で放たれている。一枝の心の傷は癒やされず無視。待っても待っても来ない手紙にせめて声を聞きたいと電話事情の悪かった時代で、京都まで行って長距離電話を申し込み、朝まで待たされながら通じない目を何度も繰り返して

いる。一枝なしに生きることの困難さの自覚からあの手この手で孤独、寂寥の心情を縷々と述べ「三十年一緒にいた」「相棒のあなた」に会いたいと願っている「余り長くない命」の「人間をあはれと思はないか」と痛々しい。要求から嘆願、哀願へと変わって必死になっているが一枝は応じない。一枝の気性を知っている憲吉は止むなしと態度を変え、兵糧攻めに出たのだ。

四八年、一枝は陽とともに、大谷藤子の山林地主の甥から援助を得て児童図書出版社山の本書店を起こすが所詮はお嬢さん芸、吉野源三郎『人間の尊さを守ろう』から五冊を出して破産した。壺井栄の『柿の木のある家』は第一回児童文学賞受賞作となったが借金を抱えての倒産で途方に暮れたがうらぶれた惨めさを見せぬのが一枝だ。この苦境を花森安治が救ってくれた。『美しい暮しの手帖』その後『暮しの手帖』となった雑誌に一枝執筆の頁を与えてくれたのだ。随筆とも掌編小説ともいえる含蓄のある物語を読む者を子どもに焦点化して五二年十二月から死の前年の六五年七月まではほとんど毎号の六十八回書いている。挿絵は切り絵画家出発となった藤森清治である。その後、藤森は切り絵画家の第一人者になっ

ている。一枝唯一の著書となった『お母さんが読んで聞かせるお話』（1972・11、暮しの手帖社）がA Bの二巻本で刊行されたのは一枝の没後六年だった。

憲吉の肺ガン死は六三年六月八日、七七歳だった。従三位勲二等旭日重光章の贈位叙勲、天皇陛下祭料その他偉大さを示す事柄を並べて新聞は大きく扱っている。遺言には葬式も戒名も墓も不要、作品を墓と思われたし、骨灰は火葬場に捨てられたし、だめなら共同墓地にとあったという。生家での葬式に五百人以上が会葬し、奈良県は村道に玉砂利を敷き詰めたという。喪主は長男の壮吉だったが、死のひと月前に選任された京都市立美術大学学長としての退職金二百万円を誰に渡すか苦慮した上で、手続きに暇取ったが最後を看取った石田寿枝（憲吉の同棲者）に渡したという。石田とは正反對に物欲皆無の一枝はそんなことは意に介さない。憲吉の作品も欲しい人にあげてしまうので一枝の手許には残されていない。対等に共に大きくなるつもりだったが結局は憲吉を大きくするために生きてしまったことに悔いが残るが離婚しなかったのは憲吉をそれでも愛していたからだろう。石田の存在を知っても平然と

していたのは本当に愛されているのは自分だという自負があったからだろう。石田が求めたに違いない結婚をせず、その気になれば離婚できたはずなのに憲吉が離婚しようとしなかったのは憲吉も一枝を本当は愛していたからだろう。一枝が憲吉にとってどれほど掛け替えのない人であったかを知りすぎるほど知っていたのだろう。

一枝が既に手遅れと気付いたのは死の一年位前だったらしいが死の直前まで『新婦人しんぶん』『婦人民主新聞』『子どものしあわせ』などに書き続けている。東京大学卒業後、映画監督になった壮吉が食欲の落ちた母に食べさせたくて小田原や三崎まで足を運んで求めてきた新鮮な白身魚を刺身にしたり一切れを、ガラスの小皿に凍らせた朝顔の花と葉を敷いて盛り付けたのを、鋭く豊かな味覚を失った一枝が「おいしいね、何処の魚？」と無理して食べてみせるのは息子の優しさへの感謝からであることを息子は知っている。死を間近にした頃、枕頭で読んであげた朝刊に「紅衛兵、北京に続々大結集」と言う記事があった。一枝がぼつりと呟いた。「急にはダメだねえー。ゆっくり考えた方がいいんじゃないか」と。十年後、「まさしく死んだ母の言葉通り

だ、いま思う」と壮吉が書いている。最晩年の「コラム」の署名は「紅」である。ここには死を前にしての尾竹紅吉の天真を伸ばしきれなかった悔しさが滲み出ているように思う。一枝の死には多くの人が溢れる愛惜の念の追悼文を寄せている。芸術的香気に満ち、自己顕示欲の微塵もない「人の世話をするために生まれてきたような」「道づくり」の人で、多くの人を輝かせた、と誰もが言葉多く語っているが、中野重治の長文の「富本一枝さんの死」の部分引用でこの稿を終わらせたい。中野が体調を崩して気分悪く臥していたとき電話で訃報を知らされた。

「眼がさめてしまうのといつしよに自分が気落ちするのを感じた。気落ちはがくつというのとはちがつて、いくらかのろのろとして、しかし大きな半径で元に戻らぬものなことがはつきりしたたちのものだった」。一枝に初めて会ったのは三年頃で童話作家の村山簗子に連れられてだが夕食を接待された。言葉がみつからぬが「豪華」「豪勢」なもので、野菜、肉の類もだが皿、鉢、小皿の類は「贅沢な味、贅沢な眺め」でそれは、「どれもこれも枠に入れて立てておく種類のもの」だったが、「罰があたるといった気持で」その美術品でむしやむしや食ったり飲んで

たりした。彼女は「くれたがりや」で「くれ方」が独特だ。二度目か三度目だったか、食事のときの皿を「焼物通なんかではない」単なる好みから何気なく好ましさを洩らしたら辞去するとき、断れない自然さで渡された。小田急線で偶然に乗り合わせたとき、降り際にチーズは好きかと訊かれ好きだというを持っていた袋から包みを出してにっこり笑って押しつけられドアは閉まったとも述べている。物資のまだ不自由な時代だった。やっと手にいれたものだろうに。一枝の独特の着物の着方。戦前に共産党員を匿ったことがある（憲吉が留守の一月間、蔵原惟人を匿ったこと）。葬式の日は嵐だった。強風雨で停電した。帰れなくなった友人二人が中野重治の家に泊まり蠟燭の灯のもとで話し合った。普段着の写真がよかった。花がいっぱいあったが名札などいっさいないのが清潔で哀悼的だった。彼女は男のような立派な字を書く人だった、と中野はいった。中野は通夜にも葬式にも行っている。

一枝の肝臓ガンによる死は六六年九月二十二日。享年七三歳。安堵村槌屋裏に憲吉と並んだ四〇センチほどの丸石に名が刻まれていた。今もそのままだろうか。

さくらびと

千島桜

ほそかわごころ
細川呉港（会員）

数年前、北海道、札幌の知人の家を初めて訪ねた。老夫婦である。南に開いた日本式の庭園。真ん中に千島桜があった。千島桜はあまり背丈が大きくならないで、根本から灌木のように枝分かれして、鬱蒼と繁る———と想像していたがその家の千島桜は直径30センチ以上もある喬木で庭の真ん中にあった。40年前に釧路に嫁いだ娘が、老夫婦が家を建てたときお祝いに道東から苗木を送ってきたのだという。40年もたつと、千島桜とはいえ貫禄である。雪や寒さに耐え、北風にやや傾いてはいるが太い幹がしっかり立ち上がっている。枝が四方に広がって、庭に君臨していた。花は小さいが白く、小さな枝の先まで一斉につくから清楚で、それでいて華やかなところもあり、やはり「桜」の雰囲気は十分持ち合わせている。咲き始めは薄紅色で、花が咲くと真っ白、それから花の終わりは、多くの桜と同様に「赤化」してピンクが濃くなるという。以前、尾瀬の長蔵小屋に泊まったとき、



傍にやはり大きな千島桜があったが、ゆっくり眺めたのはそのときが初めてだった。こちらは灌木であった。

よく知られているように、千島桜は、明治2年（1869年）に国後島から北海道根室に移植され、さらに明治36年（1903年）に市内の清隆寺に移植。今でも、清隆寺の桜は、千島桜の名所として有名である。昭和11年（1936年）に宮部金吾博士が「チシマザクラ」と命名した。今では北海道の各地に植えられている。特に官公庁の広い敷地に多く植

えられているのは、北海道ならではのところだろう。「千島」と聞くと、なんとなく北辺のロマンも感じるし、また反対に失った領土とともに終戦時の悲劇も連想させて、哀愁もある。

初めて伺った家だが、市内から遠いせいもあり一晩やっかいになることになった。日頃は誰も使っていない2階の和室に通され、布団を敷いたが、すぐには眠れない。時計を見るとまだ9時であった。いつもは夜中の12時でも寝ない男だから、眠れるはずはなかった。もちろんテレビもない。畳の部屋に、ひとりぽつねんと取り残されたようだった。

気がつくと部屋の隅に古い本箱が置いてあって、さまざまな本が並んでいる。見るとはなしに、本の背を見ると、生け花や茶花、それに焼き物の本や写真集などがあった。老夫婦が、若いときから、長い間お茶の先生をしていて、買い集めた本だろう。

お茶というのは、単にお茶のお点前やお作法を習うだけではない。床の間に掛かっている軸を読んで鑑賞しなければいけないし、もちろん茶碗や棗などの道具の美しさも見る。それから大事なものは茶花。四季折々に咲く花を、茶花という独特の侘で活ける。単に生け花という技術

だけではない。季節の変化を心で感じるとる気持ちも養成される。文武両道というけれど、お茶をすることによって、焼き物から、文学や詩、四季折々に変化する自然に、心を動かす感性をも学ぶのである。そういった主の心構えを、本棚に並んでいる本は語っていた。

本棚の一番下の段は、ファイルやスクラップブックが置いてあった。私はちょっとためらいながらも、スクラップを開いてみた。新聞の切り抜きや、雑誌の切り抜き、写真もあった。

そのうちのひとつ、ある新聞の切り抜きをなげなく読んだ。北海道の旧国鉄に長い間勤めた男の「思い出の記」だった。いつの新聞か分からないが、黄色に変色したその色から、20年も30年も前のものと思われた。しかもその内容は、それよりもっと前からの話である。

JRといえば、最近北海道新幹線や、新しいリニア・モーターカーなどのニュースが話題をまいているが、旧国鉄というのは、もっと違ったイメージがあった。北海道である。ぼっばやである。ぼっばやと聞かなくても、われわれの世代は、国鉄職員といえば勤勉で実直な人柄を連想させる。生涯、ただひたすら勤務に忠実に、そして真面目に生きていく、そう

いったイメージが強い。同じ職員同士、仲間意識も強く、時間を守り、連帯して鉄道を守った。事実そういった人が多かったと思う。私の従兄妹にも国鉄マンがいたからである。

余談であるが、数年前、中国のホロンバイル平原の炭鉱の中を走る蒸気機関車の2人の乗務員の話が映画になった。炭鉱の名前そのままの『ジャライノール（扎賚諾爾）』という映画である。もともとは、旧シベリア鉄道を敷設したロシアが、沿線に開いた巨大な大露天掘りの炭鉱で、この広大な穴の中を、輪を描きながら石炭を穴の中から運び出すのに蒸気機関車が使用されていた。たくさんの乗務員が石炭にまみれながら働いていた。

主人公とその年上の相棒は、2人で蒸気機関車の運転手と助手としてコンビを組んで長年勤めていた。年はかなり違うが2人は兄弟のように仲良く、しかもウマが合った。その年上の相棒がついに停年を迎え、炭鉱を去ることになる。弟分の若い青年は、故郷に帰る兄貴分をどうしても途中で送っていくという。退職する男は、何日もかけて、何度か乗り換え、遠い田舎に帰るのだけれど、青年はずっとついて行く。途中、心配になった兄貴分がついに弟分にもう帰って仕事に

復帰するように言う。しかし、追い払っても、追い払っても彼は黙ってついて来るのだ。

単にそれだけのストーリーだが、映画を見終わったあと、温かい人間同士の繋がりが胸に迫った。おそらく若い男には身内がいらないのだろう。小さいときから苦勞をしている。しかし過酷な炭鉱の列車の仕事の中で、やさしくしてくれたのは、兄貴分だけ。青年にとっては唯一の肉親のようなものだった。全編をとおして素朴な青年の明るい笑顔が印象的だった。鉄道に勤める人間同士の、心の絆を描いたいい映画だった。

話を新聞の切り抜きにもどそう。新聞に投稿した人は佐々木栄松（しげまつ）という釧路の人である。すでに国鉄を定年退職している。

話は自分の家の庭にある千島桜から始まる。その桜は樹齢が70年以上。背丈は高い枝で3メートルとちょっと。何本もの主幹が地面から四方に地を這うように出て、面積は畳6畳分だと書いてあるから、私が今晩泊まっている家の千島桜より全体としてはかなり大きいだろう。毎年、5月の中旬にたくさんあるすべての枝に、美しい白い花を無数につけるとい

う。その桜が、5分咲きから7分咲きのころ、友人たちを招いて質素だが、楽しい宴をした。毎年皆が集まって純白の花に見とれる。千島列島の寒気とシベリア降ろしに耐えて生まれた桜を実感するのだ。佐々木栄松は次のように回想する。

「T老人は私を幼いころから可愛がってくれた心の優しい人であった。私は彼に勧められ、また彼を慕って、同じ国鉄の職員になった。自分がまだ若い鉄道員のころ、Tは同じ鉄道員としてさまざまな助言をしてくれ、陰になり日向になり助けてくれた。しかし、勤務地が一緒だったのは最初のときだけで、あとは生涯、離れ離れだった。お互いに北海道を転々とした」という。

そのT老人が、転勤するたびに持って移動したのが、千島桜の鉢植えだった。栄松は休みをとっては、T老人の勤務先に会いに行き、自慢の桜を見せられた。

「そのT老人もついに定年になり、長年持ち歩いていた千島桜を落着き先の自分の庭に地植えにした。すると桜はみるみる大きくなり、枝を広げてみごとにあった。私は、前と同じように老人を訪ねては桜を鑑賞した。そのたびに小遣い銭を老人に持って行った。老人はとても喜んでくれた」。

その老人があるとき、栄松の帰りがけに、自分ももうこの桜は十分に見たから、栄松の家に移しかえるように言った。栄松は驚いて辞退した。その桜はT老人が生涯、北海道を果てから果てまで、転勤するたびに後生大事に持ち歩いて、苦菜をともした桜だったからだ。そのことは栄松が一番よく知っている。

「元氣だった彼が急に亡くなったのは、桜を移しかえるように言ってから、間もなくだった。T老人は自分の寿命を知っていたのだろうか。もうあの穏やかな顔に会えなくなってしまった。もう小遣い銭も持つていくところもなくなってしまった。私は心に、大きな穴があいたようだった。私の生涯の先輩であり、友人だったからだ。千島桜は遺言どおり、今は自分の家の庭にある。老人の記念樹になっってしまった。今でも先輩が私の庭にいるようでもある」と。

生涯、鉢植えの千島桜を大切にしていた国鉄マンが、停年を迎え、その鉢を地面に降ろし、みごとな花を咲かせた。その老人も亡くなって、今度は、彼を生涯慕っていた後輩の家に植えられている。その後輩も停年を迎える。こうして千島桜はT老人のやさしさや思い出とともに、後輩に受け継がれているのだ。今ではT

老人を知る国鉄の仲間が毎年栄松の家に来て、ささやかな花見をするという。

「この桜がある限り私の傍には、Tさんがいる——」と。

佐々木栄松は最後に、千島桜の利用法と手入れの仕方を几帳面に説明している。いかにも真面目な人柄を窺わせる。

まず、桜の実が十分に熟してから収穫する。真っ赤に熟した小さな千島桜の実には、紫を含んだ濃い紅色で、つぶすとすぐに紅汁が滴るほど。その汁で梅漬けをしないと。この実を染料にすると、いい色の梅漬けができるらしい。また、肥料のやり方は年に2回、木の芽が出る10日前後、すなわち5月初旬。2回目は新芽が伸びて、葉が茂る前、7月10ごろ。肥料は木の枝の先より20センチ内側に周囲6か所に穴をあけ、窒素肥料をやる。そのあとは、幹や枝があまり広がらないように、幹の「心」の留め方を細かに説明している。

2人の国鉄マンの傍で、生涯にわたって生きてきた千島桜。その千島桜に寄せる男たちの思いやりと人生。初めて泊まった旅先のがらんとした殺風景な部屋で、古い一枚の小さな新聞の切り抜きから、私の心に不思議な、それでいて充実感のある大きな世界が広がった。

陶々俳壇

兼題 「秋深し」「牙」

ピイと啼くこえのかぎりの追われ鹿 矢野一弥

◎仁哉 先日、夫婦で奈良公園へ行つて来ました。お弁当を開く私達のベンチに鹿が三、四頭近づいて来て、追いつくのに一苦労で、ゆっくり食事ができない有様でした。でも鹿は可愛い限りです。この句もよくある光景をうまく表現されていると思います。

天高く浜の秋風ほしいまま

◎正子 空が青く澄み渡り、秋のがらんとした砂浜に海風が吹き渡る風景を思い浮かべます。

秋高し歩幅広めにいちにさん 松島二三四

◎正堂 秋空の青さはぬけるように高く、健康増進の季節である。歩幅を広く速歩したい。

歩行器の母と見送る鱗雲

◎若杉 老いた母を連れての散歩だろうか。二人の歩くかなたに鱗雲が流れていた。老いた母との淋しい秋の散歩の情感が読み取れている。

満月や今日も命のありがたき 上野 京

◎正子 煌々と照る月に劣らない満ち足りた心になっころします。

マスク世界いろいろありて楽しみや

◎仁哉

秋深し鬼女が牙とぐ闇の底 日野正子

◎一弥 秋から冬に移行する月日がぐあわれている。恐妻家には読めない句ですが見事です。闇を見るのも恐ろしい。

◎由紀子 鬼女とは何の、或いは誰の例えであつたか。

己が内に潜む鬼かもしれぬ。善人になろう、なりたいたいと思いがらもふと身内の鬼が顔を出す。顔を出したら鬼を鎮めるのは容易なことではない。しばらくは付き合つてやろう。

剪定の鋏の先に秋アゲハ

◎正堂 垣根を剪定している、大きなアゲハが突然鋏の上に止まり、羽を直つかせている。

秋深し安達太良あらふ雲の渦 大内善一

◎紅朽 安達太良山頂の岩場からは「髯梯山」が展望できるがガスで覆われることが多い。晴れ間に見える山腹の紅葉は絶景であるが雲が頂を絶え間なく覆つので眺望の機会に恵まれない。頂を雲が次々に覆つ様子を「あらふ」という適切な表現をした。

木菟啼くや浅間噴煙たなびけり

◎明良 流れ長く鳥と山の景色も巧みです。

いづくより漂ふ風や金木犀 橋本紅朽

◎正堂 静かな家並を芳香がどこからか漂いきて、秋も真つた中にある。

棕鳥の黄色の足や秋深し

◎明良 棕鳥が冬前のたくわを求めて忙しく走り回っています。

乳母車幌を降ろされ秋深し 柳原仁哉

◎明良 乳母車の幌を降ろすとは見事です。

霜月や吾に良き句を給へかし

◎一弥 頭をかかえるころおもしろし。

秋深しどてらで古書に読みふける 佐藤若杉

◎正子 懐かしと秋の夜の静かに流れる時を感じます。

山道や枝一ぱいの赤い柿

◎正堂 秋たけた山道に真っ赤な山柿が枝を垂つていて美しい。

山里の音のくくもり秋深し 瀬崎明良

◎善一 学生時代毎日皇居の外堀を走り、山登りのた

めのトレーニングにはげないう頃を思い出した。今日一里明日も一里と秋ふかむ

◎三三四 里山の秋が山の奥から深まり、里もだんだん秋の景色に変わつていく様子を「里」という単位で表現したところがすばらしい。メートル法では起きない感慨です。

深秋や深編笠の僧の立つ 伊藤正堂

◎一弥 寺僧の姿を思いやる。

吊橋の真中に立つ秋深し

◎明良 山間のつり橋と周囲の秋景色が見えるよつです。

一陣の風や稲田に金の道 馬場由紀子

◎三三四 一面黄金色の稲田を、ふと強い風が吹き渡つていった。風が作った道が秋の澄んだ光を受けて金色に輝いている。地道な稲作への感謝、豊作の喜び、代々受け継がれた田んぼが守られていくことへの感慨。稲作に携わる人々、穫れた米をいただく人々が共に感じる秋の喜びだろう。農業の後継者不足が言われて久しい。日本の秋の田の景色がこの先も変わらないことを願う気持ちを込めて特選としました。

思ひ出を払ひて後の更衣

◎善一 夏に着ていた着物には、いろいろな思い出がある。その思い出をバサバサと払って、十月一日を機に冬服に替えるように準備を始めている。

【句作のヒント】

句の仕立て方で二句一章と一句一章（一物仕立）の二パターンが考えられますが、一物仕立の場合、巧く切れているか不安になることもあるでしょう。そういつ時は、下五を「かな」「けり」で切るか、体言止めにすると句を引き締める効果を期待できます。

逆に、二句一章の場合、下五を連体形止めや連用形止めにすると余情や、動作の継続を想像させることができま



編・訳 上松玲子

侮辱商法か

先日スーパー「大潤発」のチラシの、婦人衣料のサイズに、Sは「瘦」、Mは「美」、Lは「ごみ」、XLは「ごみくず」などの注釈がついていた。さらに「18歳から35歳の女性に限る。スタイルに応じて店員に相談を」とあり、論議を呼んでいる。

消費者権益保護法で消費者は商品購入、使用、サービスを受けるとき、人格の尊厳や民族の習慣などを尊重される権利があると弁護士は指摘する。さらにかかる消費者の人格を傷つける

行為は民事責任を負うだけでなく、営業許可取消も含めた工商行政管理部门の処分を受けるべきだと主張する。

『中国ネット』2020年11月17日

近親繁殖に隔離部屋を

11月29日、2021年国家公務員試験が始まった。以前と違うのは募集公告に「親族回避」に関する規定が明記されたことだ。それは「志願者は採用後すぐに公務員法第74条にある職位に就くことはできない。また、志願者本人の配偶者、直系の親族、3代以内の傍系親族及び近親婚姻関係のある者が指導的立場にある機関で職を得ることはできない」というものだ。これについて中国共産党中央規律検査委員会／国家監察委員会のホームページで、毎回公告上の回避

条項が注目を浴びるのと同様だと発表。つまり「近親繁殖」が行政機関や公的事业単位の、国営企業、大学などである程度存在し、病は人事の部分まで至っていることを反映している。

中央が地方で行う巡察監査で多く寄せられる「閥閥関係」や「近親繁殖」に関する通報は、主に金融、通信、電力、タバコなどの業種に集中している。2016年の巡察では中国工商银行の本店が管理する691名の幹部に関して、その配偶者220名と子女240名が系統内で勤務しているという事実が判明した。

多くの公的事业体や国営企業で、規範はあるものの、監督制度が緩いために実効性がないことが指摘されており、中央から地方に至るまで「近親繁殖」の連鎖を断ち切るためにも、採用にあたって各級の規律検査・監察機構は監督を強めている。腐敗の防止や効率化のためにも必要なことなのだ。

『新京報』2020年11月29日

街の八百屋の危機か

インターネットの大手企業が参入すれば、その産業に血の雨が降る。今風雨に見舞われているのは青果流通業だろう。感染

症の流行により、各居住区ごとのインターネット通販業は大いに盛り上がり、美团、滴滴、拼多多、阿里、京東などのインターネット通販大手が次々と参入している。各種の青果購入アプリでは「団体購入」を通して顧客を増やしている。こうした中、市場に売り場を構える青果業者、自分で店を構える青果業者、露天業者に至るまで、大きな打撃を受けている。

新しいメディアが伝統的メディアに取って代わる。スマート決済が集金員に取って代わる。似たようなことはこれまでもあった。以前は新聞社の編集者は結構な職業だと思っていたが、新聞社がまだあったとしても、従来の編集者の仕事はもうない。紙面デザインで新聞社の意図を伝えるというような技巧は全く無用のものになり、彼らの生計すら危うくなった。

どんなに嘆いても変化はもう起きている。当初は時代の進歩だ、新しい産業モデルだと騒いでいた人々も、生計の道を奪わ

れたとインターネットの巨頭に恨み節だ。

テイクアウトやケータリングの勃興で小さな食堂は危機に瀕したが、やがて業界内で再編が起こり、食堂は店を縮小して家賃を抑えながらテイクアウトに力を入れ始めた。店員は配達員になった。飯を食う人がいる以上飯を作る人が要る。そのつなぎ方が大きく変わったのだ。

時代の流れには逆らえないという類の楽観論で多くの市場が失われ、人知れず生まれていた物語、多くの人の痛みが、最近表で語られるようになった。

青果販売業者は早晚新たな生計の道を探さざるを得ないだろうという。近くの店の店主はとても親切な態度だ。皆自分の立ち位置で努力をしている。これも変化の一つなのだろう。私はなるべく店で買う。同情ではない。インターネットでは提供できないものを提供できると信じているからだ。店に行けばそこで昼飯の献立がすぐ浮かぶ。

これらの店の役割は皆の想像

よりも大きい。感染症が深刻だった期間、多くの人がインターネットで食料の備蓄を叫んだが、近くの小さなスーパーに食糧が並ぶ様子は、皆を安心させ、居住区の安定が保たれた。居住区の活気ある雰囲気はインターネット業者が考慮しない問題だが、住民にとっては極めて重要だ。

『澎湃新聞』2020年12月1日

虫文化を取り戻せ

コオロギ1匹、高いもので百円か200円、安いものなら8円か10円。これで昔の記憶が蘇る。さらに、前世紀50年代生まれ、60年代生まれの北京市民の生活に彩りを添えることができる。

9月、元は北京の腕白少年、55歳の周燕京さんは北方の連合チームを代表して、杭州で開かれた第1回コオロギオリンピックに出場した。

80年代生まれはめんこ遊び、90年代生まれは電子ゲーム。自分たちの頃は鉄輪を回すか、独楽を回すかですぐ飽きてしまい、血の気の多い男の子は、田んぼ

や川辺、荒れた墓場まで巡って草や古い煉瓦の陰にコオロギを探したものだと周さん。「今のうちに産地に買いに行けるわけではなく、自分で探した。コツもあってね。それが楽しかった」。

数十年来周さんと幼馴染たちはコオロギの夢を温めてきた。ところが50歳を過ぎてみれば、時代から外されていることを発

見して愕然とした。街角に置かれた机の上でコオロギを闘わせる光景が見られなくなった。どこか「虫合わせ」ができる場所を探してみたが、2、3年何の進展もなかった。

2017年西城区白塔寺街区が一新され、白塔寺に集会ホールができた。近所に住む愛好家のメンバーがこの機に交渉し、集会ホールの責任者に掛け合い敷地の一部を闘虫場として借りることができた。

いわゆる闘虫場は露天に机と日傘、籐の椅子が数脚ある造りだ。活動の前には周さんが会員に連絡する。中心メンバー以外にも密雲県や昌平県など郊外か

ら駆け付ける会員が集まって2時間ほど15番ほどの取り組みを行う。数年の活動の中で会員たちの研究心も衰えず、唐代や宋代から伝わるコオロギや虫文化に関わる文献を研究すると同時に、良い虫を確保するために8月8日を過ぎると近郊の田畑や山地、さらにはコオロギの主産地である山東省の各地を巡って虫を集めている。

「わしらの年代は誰も〈三高〉（高脂血症、高血圧症、高血糖症のこと）持ちだが、普段血圧の薬を飲んでいても、虫の季節になると自然と下がるんだ」と周さん。虫探しに備え、会員たちは普段からウォーキングや体操をして鍛えているそうだ。

周さんや仲間たちはコオロギの文化的背景を研究し始めた。「楽しむだけじゃなくて、虫文化をどう次の世代に伝えるかを考えなくてはいけない」と周さん。「皆この歳だからね。若い人に伝えて盛り上げてもらわないと。博物館入りはご免だ」。

『瞭望東方週刊』2020年24号 2020年12月3日

カホ会通信

◆第10回理事会の議題（12月17日開催）

今月は下記内容で審議を行った。

●確認事項

11月19日第9回理事会議事録（案）が確認された。

●決議事項

1、令和3年1月～3月協会活動方針の件

コロナの感染が拡大している状況を踏まえ、「安全第一」の観点から、冬季休暇は12月29日から1月11日までとし、3月末までは活動を自粛することが決議された（詳細は「善隣」1月号送付時に折込チラシにて連絡済）。

2、令和3年度正会員・協力会員会費の件

原案通り決議されたが、詳細については別途ご連絡する。

●討議、報告事項

1、資金繰りについて（定例報告）

11月末現在での資金繰りは特に問題はないが、テナント各社の経営状況はコロナ禍の影響を受け大変厳しいものがあり、今後はテナント料の支払い、契約更改などに万全の注意が必要であるとの報告があった。

2、継続討議「善隣協会閉鎖」の件

コロナ禍で落ち着いて討論する雰囲気ではないので、もう少し時間をかけて話し合いを継続することとした。

（事務局長 藤沼弘一）

同好会だより

新型コロナウイルスの感染防止のため、当分の間は当会館での活動はお休みします。

※「自宅で俳句会」参加者募集

「陶々俳壇」では、俳句会のメンバーだけでなく、会員・誌友の方からの投句を募集します。自宅にいながら俳句会を楽しみましょう。

【進め方】①投句：前月末までに次の月の兼題と自由題合わせて5句を作り投句します（メールあるいは郵便、ファックスにて）。②選句：集まった全句から7句を選び、うち1句を各自の特選とします。その際、選句の理由などをコメントします。③選句結果発表：全員の選句結果を各自に送ります。④「陶々俳壇」に掲載：馬場由紀子先生がその内容をまとめてくださり「陶々俳壇」に発表されます。ご興味がある方は、事務局（福富）までご連絡ください。

みんなの写真館

現代の「茶館」（表紙）

革命前の北京の車夫の生活を描いた「駱駝祥子」（ロウトウシアンズ）などで知られる作家、老舍に『茶館』という戯曲がある。清末から第2次大戦の終わりまでの北京の歴史をある茶館を舞台に描いた名作である。

ここはそれにちなんで「老舍茶館」と名付けられた現代の茶館。北京前門外にあり、各種のお茶と軽食のほかに、カメラの位置の左後方に小さな舞台があって、昔の北京をしのばせる演芸も見られる。

（田畑光永）

理によって国交正常化が実現し、年末には北京の日本国大使館が設置されました。

翌年の1973年正月には大使館主催の、新春祝賀パーティーが大使公邸で開催され、駐在員が招待を受けて小生も参加しました。

在中国日本国特命全権大使「小川平四郎氏」は初代の大使です（故人）。

上の写真：初代日本国特命全権大使小川平四郎氏の大使公邸での祝賀パーティーのご挨拶です。

初代日本国特命全権大使小川平四郎氏の思い出（表4、上下）
日中国交正常化48周年を迎え、懐かしい写真がありました。

下の写真：小川大使と出席懇談の明華貿易・安藤貞行会長（中央）、呉山貿易・前田丸子女史（右から2人目）と小生（右）です。

（新宅久夫）

1972年9月田中角栄総

2021年2月の行事予定

3日（水） 13：00 「自宅で俳句会」

兼題「雪割草、白」及び当季雑詠から5句を投句（1月末までに）

25日（木） 14：00 第4回オンライン講演会

「米国社会の現状とバイデン政権の展望」

渡辺靖氏（慶應義塾大学教授）

☆本講演は、zoomで行います。そのミーティングIDとパスコードは、当会からの配信メールに登録されている方で参加希望された方には、当日15分前までに、メールにてお知らせいたします。また、配信メールに登録されていない会員・非会員向けには、当日、15分前から講演終了時間まで、ミーティングIDとパスコードをホームページ（<http://www.kokusaizenrin.com>）に掲載し公開します。

※「緊急事態宣言」の発出を受け、当会は2月7日まで協会活動を休止します。

2月の会議予定

10日（水） 14：00 財政委員会

18日（木） 15：00 広報委員会

18日（木） 13：00 理事会（第11回）

※下線は通常日程に変更あり。



みんなの 写真館

